

東遊行囊抄

五之六

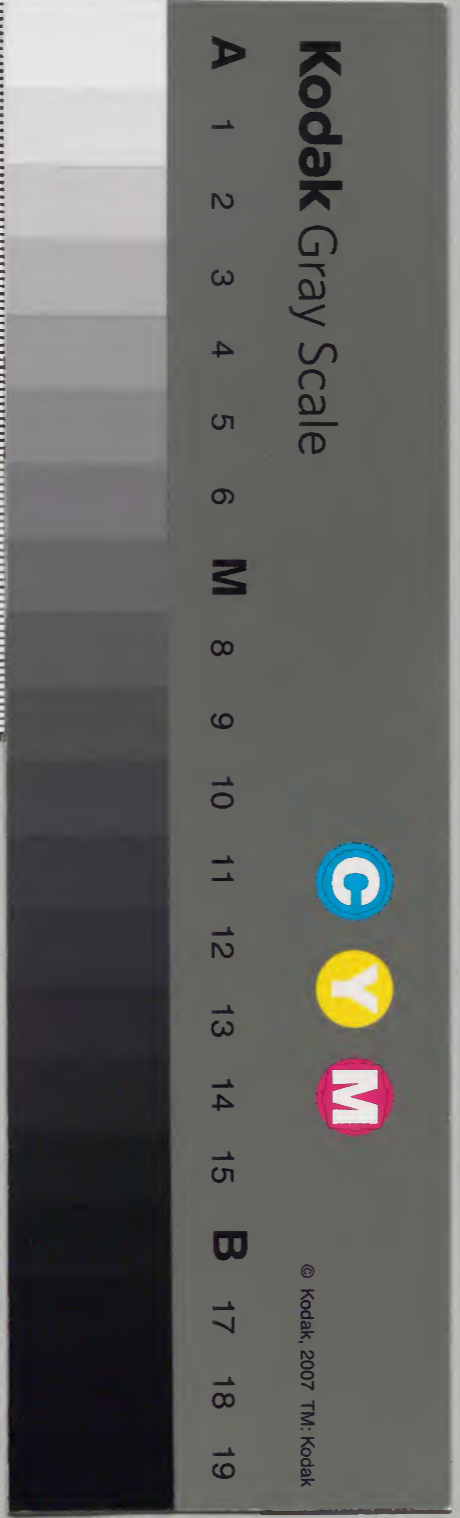
和書門	二九四五三	函	二二二	架	一一三	冊	五一
類	號						

內閣文庫	二九四五三	冊	五一	架	二二	函	毛
和書	號						

內閣文庫	番號	和 29453
	冊數	51 (39)
	函號	177 1134

地七四一

丙二二〇八二號



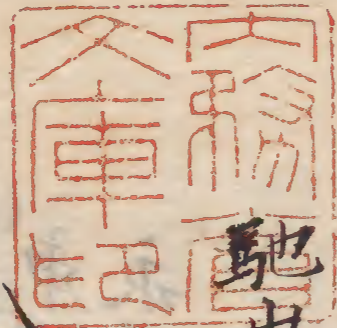
東遊

行囊抄五

西一一〇八一號

堀氏
文庫

花廼家文庫



揚水

分村ノ東ノ端ニアリ自是西紀伊殿御領
御領 鈴木八右衛門支配

由村

松村ノ中ニアリ 塩濱村 自海道右方
海辺ニアリ

日永 長キ村也

幡宮 左ニアリ 小社 全方ニアリ 地長六間
名不知

了昌寺 浄土 真正寺 一向

日永川 村中ニアリ 地八間 砂川也 或ハ
平代野川共云

各所方角抄ノリ 地長六間 是モ日永村ノ中ニアリ

伊勢名所撰記のそとに濱村といふ所は城のありし所なり
往來の船の出入の便のたよりありて日水といふ
ありし所は濱村といふ所なり
伊勢名所撰記のそとに濱村といふ所は城のありし所なり
往來の船の出入の便のたよりありて日水といふ
ありし所は濱村といふ所なり

東鑑曰元久元年^{三日}若菜五郎構城塙六ヶ所所謂曰
永若松南村高角関小野等也云粗関ノ條下ニ記之

赤堀川 或ハカハケ川共
云地長十一間

濱田村 或ハ赤堀村共云或ハ濱村共名所也

惣見寺 高田門徒 東禪寺 全宗

地長八間 濱田村ノ中ニアリ

伊勢名所撰記のそとに濱村といふ所は城のありし所なり
往來の船の出入の便のたよりありて日水といふ
ありし所は濱村といふ所なり

四日市 自石某所到于此 御領 鈴木八右衛門支配

通所内小橋三ヶ所アリ何モ長三四間ノ小橋也

御旅館

常徳寺 一向 真光寺 一向 見福寺 禪宗

光雲寺 浄土

諏方大明神 驛ノ東ノ端右ノ方ニ有

追分 驛中札ノ辻ニアリ自是左ノ街衢ニ入
北ノ方ニ赴クハ萬野ヘ行路也

曾丹村 高角村 三日平氏着菜上高カ城擲ノ構
也六ヶ所ノ一所也

寺方村 萬野 此所ハ土方 領所屋敷城アリ
自四日市到于此行程三里

^{四日市}自萬野江別ヘ行路アリ
此驛右ノ方海濱也自是南海東海ノ便船アリ

天正十年六月二日惟任日向守光秀謀叛シテ信長公
信忠卿ヲ殺シ奉ル其比
家康公ハ泉別塲ニ在御座信長公ハ古又ヲ聞召經伊賀
路出伊勢給ニ 四日市ニテ船ニ召尾別智多ノ郡大
野ニ著御無克故遠別ノ濱松御居城ニ入セ給ト云

有九光廣ハ看嘴ト云

四日市 船ニ召尾別智多ノ郡大野ニ著御無克故遠別ノ濱松御居城ニ入セ給ト云
此所ハ土方 領所屋敷城アリ 自四日市到于此行程三里
此驛右ノ方海濱也自是南海東海ノ便船アリ
天正十年六月二日惟任日向守光秀謀叛シテ信長公
信忠卿ヲ殺シ奉ル其比 家康公ハ泉別塲ニ在御座
信長公ハ古又ヲ聞召經伊賀路出伊勢給ニ 四日市ニテ
船ニ召尾別智多ノ郡大野ニ著御無克故遠別ノ濱松御居城
ニ入セ給ト云

癸未紀行日

四日市 四日市場人争赴 交易添得一日多
鄧中恐作公超霧 処々高買相共遇

遠遊紀行日

四日市

逆旅集来四日市

何必門寅由已矣

再遊紀行日

四日市

独坐作麼生 不妨晚市聲 一心為主處 百物与吾平
塵下燈光暗 庭中月影明 冥蛩秋草程 風度不知驚

追分

四日市ノ驛ノ東ノ端ニアリ是ヲリ左ノ
街ニ入ル 千種越ノ路ナリ

保穗

小屋代 梅津

千種

此所ハ江列ノ山也 江列千種村ハ出ル

永禄十二年十一月信長經千種而上京謁義昭々々

授脇指 國光 於信長 織田家譜

元龜元年五月九日信長到江列自若別經 朽木谷使森可成守

志賀宇佐兩城 佐久間信盛守長原城 柴田勝家守長光

寺中川 八郎右衛門守安土 木下秀吉守長濱而歸岐阜

佐々木殘黨守築江城 塞路次蒲生 右兵衛大夫賢秀等

為信長御導赴千草 越時佐々木承禎使救谷善住房子房狹

信長放鉄炮其西玉誤 中信長暑衣之西袖從者大驚尋

索山中信長止之廿一日著岐阜

江列桐畑ハ越ル 毛同進ナリ 梅津ヨリ別レテ越ル也

伊勢名高孫運。三ヶ川糸田の糸子種より四ヶ川
つる川々々を乃川糸あらん

又本 我らうまを此川糸あらん

御館川 川上ハ江別千種山也地アリ長五十間
此橋ハ時ニヨリ長短不定砂川ナリ

北市場村 或御滝川共云ト

川原町 羽津川ノ西ノ岸ニアリ

羽津川 地ナリ長五十間是モ時ニヨリ
長短不定

二重堤 羽津村ノ内也

一色村 自路右ニアリハ村 堤ノ辺ヨリ
見ユル

カ子ハ村 羽津ノ内也堀ホアリ自是東桑名領
西御領 鈴木ハ右衛門支配

羽津村 右ノ路畔ニ夫婦石トテニ並テアリ

山神森 左ニアリ

此所ハ天正十一年五月織田信雄ト秀吉ト夫田川ニ

テ和睦調ニ時ノ秀吉ノ陣所也

白樫村 出羽津路ヨリ右ニアリ
路ヨリ左ニ見ユル

アインハ村

八幡村 羽津ノ御ノ内ナル故ニ羽津ノ八幡村云

八幡宮 村ノ東ノ出口ニアリ

ヨナキ川

持福村

入口左ノ方ニ榎木一本アル所ハ昔持福ノ何某カ曰
壘ナリ但徃昔富田三郎カ壘歟

藥師堂 左ノ方ニ在 小社 左ノ森ノ内ニアリ

ノ富田村

山神ノ社 村ノ左ニアリ

東鑑云元久元年三月九日武藏守朝政飛脚到來申云
去月日雅樂助平維基子孫等起伊賀國中宮長司度光
子息等起伊勢國各叛逆云彼西國守護人山内首藤刑
部丞經後相尋子細之處無左右企合戰經後依無勢逃
亡之間出徒等虜領二箇國固鈴鹿關八峯山等塞道路
仍無上路之人云同十日京都飛脚歸洛謀殺人更發向
彼國可令亂殫之由被仰朝政云云
同四月廿一日武藏朝政飛脚到著甲云去月廿三日

出京爰伊勢平氏等塞鈴鹿關索險阻之間縱雖不遂合
戰人馬依難通之迴美濃國同廿七日入伊勢國疑討議
自今月十日至同十日合戰先襲進士三郎基度朝明郡
富田之館挑戰移剋誅基度并舍弟松本三郎盛光同四
郎同九郎等次於阿野郡攻撃出八郎貞重及子息伴類
次到多氣郡与庄田三郎佐房同子息師持等相戰彼輩
遂以敗北又生虜河曲刑部大夫允雖靡西國蜂起不
經三日件殘黨猶右伊賀國重可追討之云云

東富田村

西福寺 一向左ニアリ

植田村

路ヨリ右ニ見ユル

前田村

長命寺 一向宗ノ村ノ左ニアリ

松寺邑

村ヲ出テ石ニアニカス村見ユル 富田屋敷ニアリ

浅香川

地長七十三間此川ハ左ノ方浅香山ヨリ流出テ右ノ方アニカスノ村ノ東ヲ

通リテ海ニ入

旧墨 アサケ川ノ東ノ岸橋ヨリ左川上ノ方ニア

リ浅香城ト云ニハ是也

織田家譜曰永禄十二年八月信長進發勢別到桑名攻

浅香城水ノ下秀吉為先手城陷ル

江源武鑑云佐々木拔貫奇承禎ハ江別大守佐々木義

秀ノ一族ニテ其身江別ニ在ナカラ志ヲ三好山城

入道笑岩ニ通ニ屋敷ニ返ニ勢別回司北畠源中約言

具教ト内和ニ將軍義昭ヲ奉討佐々木義秀ヲ滅ニ江別

ヲ承貞一因ニ領セントテ江別ヲ出テ大河内城ニ楮

箆ル江別ノ屋形義間之織田信長ト西旗ヲ以攻之ト

テ永禄十二年八月十八日江南ノ旗頭等鈴康越ニ

勢別ニ赴ク同十九日義秀觀音城ヲ立テ君カ鼻越ヲ

北伊勢桑名ニツキ陣取給フ

同廿日尾別織田家濃別岐身ヲ立テ桑名ニ到陣ノ義

秀信長參會ノ軍ノ評定アリ

同廿三日西將水造ノ城ニ陣ヲ移ニ同廿五日浅香城

ヲ攻ム信長ヨリハ水ノ下藤吉郎不破河内守林佐渡守

三人ニ其勢ハ千七百騎江湯ヨリハ目賀多棋津守後

藤喜三郎同左馬允進藤山城守四人此勢七千五百騎

也廿五日午ノ刻東ヨリ城ヲ攻ル城將水造刑部少輔防

戦スル奇手ノ方へ討取首三百七十三也然ルニ城將
終ニ叶フニキ莫ヲ知テ降参ニ御先勢ニ加リ案内
者仕ラント云送ル兩將即赦之城ヲ請取同廿六日瀧
川文内馬洲十兵衛ニ奇ノ者七百入ヲ添テ全守之江
源武鑑ニ委ニ信長記
趣トハ相違ナリ

柳村 燒蛤ノ名物此所ニアリ

追分 自柳村左ニ赴キ江別ノ路アリ是ヲ旅加
走ト云或ハ又君カ知越共云

旅加 自追分到テ
此五里余

於夫化村

名穂生村

真光寺 一向宗 村ノ左ニアリ

天満宮 左ノ方赤土山ノ麓ニアリ此赤土山ヲ天

神山ト号ス是昔ノ名穂生何某ノ城趾也

天正十二年織田信雄ト秀吉鉾指ノ時秀吉以蒲生忠

三郎氏卿令守名穂生城

追分 是ハ西屋川ノ西ノ岸ニアリ是ヨリ左
ニ赴キ薦野へ行程三里餘

桑部旧塁 所屋川ノ橋辺西ノ岸ヨリ川上ノ方
廿余町ニアリ

天正十二年信雄ト秀吉ト對陣ノ時秀吉使蜂須賀茂

右衛門正勝子桑部城ニ云

自追分コトモ野ニテ 薦野 自追分到テ此ニ里
間村々在之 余士方氏館在之

町屋川

凡川三町余在橋ニケ所西ノ方十二
三間東ノ方ノ橋四十八間但是七長
短不定元八百廿間ノ橋一也川上ハ江別ノ本郷ヨリ
流出ル此川ニツキテ江別へ越ル上ルアリ

豐臣家譜曰天正十二年秀吉入赴伊勢陣于羽津使蒲
生忠三郎氏御守健生城蜂須賀彦右衛門正勝守桑部
城信雄又屯長嶋桑名

秀吉謂富田左近津田隼人曰我受信長之恩惠其深厚
非口舌之所能及也我誅明智光秀信長何不閉眉於黃
壚乎而信孝信雄皆欲誅我々不得已而出軍素志何然
乎信孝既不良死我今請于信雄交知事名成則我倚之
并躍在此而已唯願御曹圖之富田津田深感之不覺涕
泗之垂乃往桑名告信雄々々即同之二人歸而言之秀
吉悅十月廿六日秀吉于信雄於矢田河原有謁見秀吉

未于曲膝垂淚而不言獻良劍而帰營自是西軍凱樂秀
吉歸大山城於信雄

安長町

町屋川ノ西ノ岸ニアリ

大福野邑

左ハ山下ニ觀音堂アリ 福得松トテ古木一木通リ西
ノ左ニアリ

矢田村

自是桑名ニテ街續也

八幡宮 通町ノ方ニアリ 華表町並ニアリ
濱地藏 自海道南十八町ニアリ 靈石也

天武天皇宮

矢田ノ所左側ニ在華表扁曰天武
天皇宮

是ハ大友ノ亂ノ時天武帝ノ行宮ノ跡歟但古記ニ持
統天皇再桑名頓宮トアリ
日記曰壬申ノ亂ニ天武帝伊勢國ニ赴テ三宅連力軍
兵五百人ヲ得テ鈴鹿關ヲ塞ク天武子高市皇子大津
皇子ハ皆近江ニ有ケルカ潜ニ逃テ伊賀伊勢ノ内
ニテ天武ニ參會シ給フ此時天武跡大河ノ辺ヨリ遙
ニ天照皇太神宮ヲ拜セラル去程ニ村國ノ男依美濃
國兵三千人ヲ催シテ不破關ヲ塞クヨシ注進ニケル
ハ天武即高市皇子ヲ遣シテ令守之又東海東山ノ西道
ヘモ使ヲ遣シテ軍兵ヲ催シテ天武持統モ口共ニ伊
勢國桑名ニ暫ク逗留ニシテ休息ニ給其後天武桑
名ニ持統ヲ留置天武ハ不破ヘ赴キ給ト云
或書曰持統天皇天智帝姫也天武帝姫也壬申ノ亂ニ天

武ニ從テ伊勢國ニ到リ桑名ニ行宮ニシテ乱シツ
テリテ後大和ノ都ニ赴キ給フト云
日記曰持統天皇即位六年伊勢辻宮アリ天皇臨幸滅
伊勢伊賀之粗悉賜民老幸三河國云
湘秦紀行日此所疎ハ古壬申ノ亂ニ天武持統ハ經歷
シ給フ路ナレハ其頓宮ハ何クナルヲシト問ヘト答
フル人モナシ伊勢國ノ風土記ニ傳ハラ子ハ可考ヤ
ウモナシ

矢田片所 左ノ方ハ堀也

桑名 自四日市到テ此

城主 松平越中守

願證寺 一向宗

惣門 二八テ左

壽量寺 法華宗

十念寺 淨土宗
 光明寺 淨土宗
 光德寺 淨土宗
 藥師寺
 右通町 在之此外寺院多之

城ハ通所ヨリ 右ノ方海際ニ在 七屋橋六間左右堀之
中ノ方 四屋門 京門ヲ過 北片町ノ前ニ追手ノ門
 前ニ橋アリ長十間許船入ノ堀ニ渡ス
 此城ハ国司北畠殿ノ一族數代守之永祿十二年織田
 信長發兵當国浅香城ヲ始數城ヲ攻給其北北畠具教
 卿信長ノ武威ニ懼請和且信長ノ二男三助信雄壻ト
 之 國務ヲ讓ラント約ニ暫ク鉾指ヲ止ム其後又北畠
 ノ臣信長内通ニテ具教卿ノ一族悉ク滅シテ信雄領
 之
 天正年中秀吉公御代氏家内膳正行廣居當城分限ニ

万二千石慶長五年九月關ヶ原没後被沒收之事ハ左
 見工同 年本多中務大補忠勝賜當城自上統大多喜移
 此地大多喜共ニ領ス分限十五万石内十万石桑名城也
 同十五年十月十八日ニ忠勝率去行年六十三歳同年
 息義濃守忠政家督相續分限全高元和三年乙巳忠政在
 加増播列姫路ニ得替同年松平隱岐守定勝初名河内守
 轉遠別懸川移當城分限十一万石寛永十二年伊豫松
 山得替同年松平越中守定絶轉濃列大垣移當城定絶
 定勝ノ次男也慶安辛卯十二月十五日卒歳六十歳息
 撰津守定良家督相續正保三年叙從四位寛文四年十
 二月 卒息越中守定重家督相續
 織田家譜曰永祿十二年八月信長進發野羽到桑名攻
 浅香城

豊臣家譜曰天正十一年正月廿二日秀吉率一万五千
兵到江南而聚諸兵凡七万余人乃分之為三使美濃秀
長筒井順慶伊藤掃部助氏家左京亮稻葉伊豫守率兵
二万五千乱入于土岐多羅口使三好孫七郎秀次中村
孫平次等率兵三万侵掠于君畑越秀吉率三万人經安
樂越不論岩谷而進瀧川分兵拒之秀吉進軍燒桑名迎
瀧川怒曰吾既分兵故從兵不多不能防秀吉之侵掠腐
腸切齒得不可言今夜伺敵陣而襲之則豈可不快乎秀
吉令軍士曰瀧川赤老於武畧者也彼必乘夜而襲我也
汝等其勿懈馬於是瀧川謀計皆違
同五月秀吉人赴伊勢陣羽津田畧信雄亦屯于長嶋桑
名関ヶ原軍記曰長康大藏大輔正家八石田治部少浦
三成等之関ヶ原表在ケル力九月十五日合戦西

兵敗北ニケレハ正家ハ水口ノ居城ニ歸ラントテ既
ニ桑名迎ニテ采リケルニ其比山罨道阿弥ハ福嶋掃
部頭居城長嶋加勢ニテ被城中ニ有ケルカ関ヶ原
合戦ニ
家康公御利運西軍悉ク敗亡之由ヲ聞我居城大鳥居
ニ歸ラント思大嶋ヨリ桑名ノ東ニ上リケレハ不レ思
長康ニ行合タリ山罨天ノ与ハト悦ヒ足輕ヲカケテ
撃之長康落武者ナレハ草木ノ動クモ敵カハ懼ルハ
折ナレハ一支モセス散々ニ成テ落失ケリ山罨兵追
蒐々百騎討討トリ大ニ悦テ桑名ノ城ニ抽寄ル城主
ハ氏家内膳正行廣加勢氏家志摩母寺西備中守也山
岡使ヲ立ケルニ城兵ニ関ヶ原敗北ノ事ヲ聞
家康公ノ御威光懼タル力速ニ降参ス道阿弥則氏

春日大明神社

江戸町ノ左ノ方ニ在旅籠町共云
華表 通町ノ左ノ側ニ立社領百

石ノ御朱印地也社家五人一卿司左京大夫ニ石垣左
近大夫ニ佐藤民部太輔四鬼嶋兵部太補五同式部少

輔 社僧佛眼院御朱印ノ内六十石此寺ニ收納スル也

赤須賀町 是船着ノ所也遠見ノ燈籠海際ニア

伊勢名所拾遺集ニハ川口ノ関ヲ一志郡ノ内ニ入テ

才ホノキテ書タリ凡関所求要祀地置之一志郡ノ川

口ハ十六御共ニ平地ニ入逼迫ノ地ヲニ此所ハ美濃

路ノ要祀東南海ノ湊ナレハ必定川口関トハ可為此

地歟

伊勢名所拾遺集ノイソノ川ノ関 一志郡

川ノ口ハ十六御ノ惣名トシテ伊ノ関ハソノ村ニあり

と云之れ其湊ノノ沖ノ方ニ四里有之れ其ノ名ハ伊勢

ノ田村ト云々ト云フ太平十二年十月ノ日ニ在武尊ノ

ノ皇代ノ事ト云フイソノ川ノ関ノ名ハ伊勢ノ田村ト

云々ト云フイソノ川ノ関ノ名ハ伊勢ノ田村ト

冬十月依太宰少貳藤原朝臣廣嗣謀及發軍幸于伊
勢之時河口行宮内舍人大伴宿称家持作歌

乃美云 川長神ノ事ト云フイソノ川ノ関ノ名ハ伊勢ノ田村ト

或書曰聖武帝天平十二年冬伊勢桑名ノ行宮ヨリ太

神宮ニ参詣シ給テ大野ノ東人ヲ大將トシテ築紫ヘ

ツカハシ朝敵太宰少貳藤原廣嗣ヲ退治シ給ト云

又或書曰天平十二年藤原廣嗣謀叛遣大野東人紀飯

鷹等攻之安陪黑鷹捕廣嗣斬之天皇幸伊勢奉幣太神

宮盛美濃伊賀遷都山城国相樂郡創造内裏是謂茶仁

宮下畧

新設 川の口より尾刻熟田ノ宮辺ニテ横渡七
 里ノ夏ヲ記ス此渡木曾川ノ未ナル故ニ水
 出シハ下リ安沙サシヌレハ上リ難シ風烈トキハ可
 慎船覆人溺死スルノ間在之
 伊藤物語云々

河口湊 南海東海ノ船著并濃列所々ヨリ川
船往来ノ湊也大概記之

箕松 鍋田通ト云ハ七里灘ヲ除
テ熟田ニ到ル船路也川ノ内ヲ
通りテ熟田前ニシテ一里
許海ヲ漕テ熟田岸ニ著也
雖程少遠不障風雨静ナル
船路也

犬山 成瀬氏
城下

太田 白川口到テ
此十八里

岐阜 江渡

大垣 富氏
城下

七里灘 是ハ川口ヨリ尾刻熟田ノ宮辺ニテ横渡七
里ノ夏ヲ記ス此渡木曾川ノ未ナル故ニ水
出シハ下リ安沙サシヌレハ上リ難シ風烈トキハ可
慎船覆人溺死スルノ間在之

是者河口ノ湊ニ濃列所ニ伊藤ノ記

伊藤物語云々

いづれより渡れたるありのむらさきつばねはくはるるをこそ
いととほしき思ひはれしひさしきまはらふ山はなほゆき
宗重の死のうつくしき水田車一月の夜をいそいで一白体是
七の夜半の雨送しとて伊勢にわくの舟をひの船とて
何れか風波のさうせり人よ船とてめを中津に

あつるれ浪のあひひらうとくはつる舟はつら
鳥丸の酒を完るる舟に舟はつる舟の成たありし舟は
うつくしき思ひはれしひさしきまはらふ山はなほゆき
ぬたは伊勢屋住法にあそび大海の舟の舟にあの舟
月のえんたうと波いそいで舟はつる舟の成たありし舟は
いづれより渡れたるありのむらさきつばねはくはるるをこそ
いととほしき思ひはれしひさしきまはらふ山はなほゆき

あつるれ浪のあひひらうとくはつる舟はつら
鳥丸の酒を完るる舟に舟はつる舟の成たありし舟は
うつくしき思ひはれしひさしきまはらふ山はなほゆき
ぬたは伊勢屋住法にあそび大海の舟の舟にあの舟
月のえんたうと波いそいで舟はつる舟の成たありし舟は
いづれより渡れたるありのむらさきつばねはくはるるをこそ
いととほしき思ひはれしひさしきまはらふ山はなほゆき

舟中歌枕一敵近 知是熱田宮裏鐘 船つる

あつるれ浪のあひひらうとくはつる舟はつら
鳥丸の酒を完るる舟に舟はつる舟の成たありし舟は
うつくしき思ひはれしひさしきまはらふ山はなほゆき
ぬたは伊勢屋住法にあそび大海の舟の舟にあの舟
月のえんたうと波いそいで舟はつる舟の成たありし舟は
いづれより渡れたるありのむらさきつばねはくはるるをこそ
いととほしき思ひはれしひさしきまはらふ山はなほゆき

あつるれ浪のあひひらうとくはつる舟はつら
鳥丸の酒を完るる舟に舟はつる舟の成たありし舟は
うつくしき思ひはれしひさしきまはらふ山はなほゆき
ぬたは伊勢屋住法にあそび大海の舟の舟にあの舟
月のえんたうと波いそいで舟はつる舟の成たありし舟は
いづれより渡れたるありのむらさきつばねはくはるるをこそ
いととほしき思ひはれしひさしきまはらふ山はなほゆき

あつるれ浪のあひひらうとくはつる舟はつら
鳥丸の酒を完るる舟に舟はつる舟の成たありし舟は
うつくしき思ひはれしひさしきまはらふ山はなほゆき
ぬたは伊勢屋住法にあそび大海の舟の舟にあの舟
月のえんたうと波いそいで舟はつる舟の成たありし舟は
いづれより渡れたるありのむらさきつばねはくはるるをこそ
いととほしき思ひはれしひさしきまはらふ山はなほゆき

癸未紀行曰 廿四日之夜與昂羅同從源豆別自
執田兼官船渡海明日到桑名作古詩一篇述事實

羅山子

官使來到尾陽洲執田驛亭暫憩休本列西槐遙勞憫
悠憇命吏贈彩舟浹自之際五馬後到此同掉刀火流
船昂揚聲推檣揖大夫兵衛建戈矛東西南北千里目
浩々陽々乾坤浮聞說海上有仙子人自蓬萊宮裡遊
春叩門裡大真院渺茫問津揚通幽元是幽冥不通信
畢竟仙境何為求感得人生本如寄渺然一票亦一逼
鷲飛魚躍上下道阿誰來梓道孔丘揮筆欲續玄虛賦
蠡測智淺愧阮列有酒有茶又有草曉汲清水喚乾猴
驟雨滴了晴偏好坐來耳邊響颼颼葵紋布幕蓬屋上
望中多景簾上釣潮滿風穩七里際隣邦山遠回双眸

想像當時別機者溶漾出沒見白鷗寒月夜曙朝墩影
時有輕舸漁網投舳艦繫帆桑名待可謝封姨與陽侯
桑名既是勢別地天武皇后曾停辮久聞聖武行幸路
廣絕不能遂送謀自茲望洛三十里長途漸近忘客愁
有母有弟武城下海山雲水思悠悠膝下相別遠遊自
記憶韓公膏諭政佳境名區所輕歷長公紀行欲寄白
家君安穩我無恙願畢官事大力頭

翌日黎明桑名漁般十隻無二隻相連投網取魚
小黑鯛弱魚滿籃以捧之使官使見之蓋慰目下
也不敢受一尾雖古之羊續不能過之時白鷗群
飛相亂有羨弱魚之情殆與鷓鴣白鷺窺其使者
無以異也余思日人皆於白鷗無心日閑日熟眠
日万里誰能馴然今如此見之初驚於此知有

有欲者必有所制也

歎乃一聲奇 飛行岸欲移 白鷗如釣波 初見愧鸕鷀

全紀行 歸路

桑名舟中作

欲到熱田時潮干舟不進後支以繩牽之恰似陸行過舟

桑名解纜海漫漫

白日昭回眼忠寬

水府十尋有

竜睡

天池万里見鵬搏

雲開長嶋城樓聳

岸近

熱田潮汐乾

安得方如曹植筆

文章筆力捲波瀾

遠遊紀行曰

自四日市行桑名乘舟到尾張者有要直渡者亦

有之嘉崇日家君戒云此處勿直渡雖捷殆也

則歷桑名而著尾張矣

山崎闇奇

四日市場邸舍忽 征人幾過尾陽東

忠臣宣踐簷

臺迹

孝子當登樂正舸

今古名高桑名渡

乾坤

神在熱田宮

蒼松千丈藤蘿繞

欲作徵詩輸寸衷

七里波

再遊紀行

全

暫詣熱田聊致恭

苗頭已艤意忽々

短撓輕取好

乘興

片帆高懸許盪胸

深海巨量漁網底

遙山

入望容船中

西京漸近仲秋節

東尾送來七里風

雲水淡々涵赤日

城樓擬々聳蒼穹

桑名步下歸

心迫

頂笠腰刀呼馬僮

湘秦紀行曰十二日

明曆四月

早朝雨个一夕晴子共小

樓船ヲカケテ

熱田ノ岸ヲリ

掉サテ漕出シハ海

上一里許ニテ

雨ニ漸々晴テ順風ニ成ケレハ忘レ

戸ヲ開キ四ニ顧ルニ北ニハ那古野ノ城西ニハ桑
名ノ城流光ニ映シテ動キヒラメキ東南ヲ回望ス
レハ海氣混々波浪浩々雲ニ接シ虚ヲ涵ス三万里
ノ弱水モ是ヨリヤ到ルラシ九万里ノ鵬翼モ爰ニ
ヤ搏ラン玉妃大真院モ近ケレハ臨邛ハ道ナシ尋
モヤ来ルラン五色ノ雲モ夕ケヒケハ童男如女モ
爰ニヤ老ヌラン宗慤カ筆モ長風ニ投ツヘク水華
張融モ再ヒ生レテ賦ヲ作ルラシ既籍カ智モ是ニ
比スレハ浅カリナニ元菴カ志モ是ニタクテハハ
狭カルヘシ尾張ト伊勢トノ境モ此海中ニ有ナレ
ハ少陵カ吳楚東南ニ拆ト洞庭ヲ詠セシモカクヤ
ラン長嶋ノ墨ノ簪ルハ岳陽樓ニヤ夕トフヘキ眼
ニフル、雲山樹影ノ中流ニ見ユルハ金山ノ彷彿

タルニヤ漁父ノ扁舟ニ掉サスハ呂望カ隱ルカ
任公カ釣リヲ垂ルニヤ魯望カ圖書未家ノ畫ハシ
ヲ子共アナクノ舟コナクノ船互ニ行違ハ湘洛
来往ノ客ノ漂泊セル成ヘシ数日ノ間輿中ニセリ
クセリ篋中ノ鳥ノ如ク成ニ今日ハ浮家従之ニ
穩座ノ聊心モ廣ク休モ睜ニ似リ以僕モ是ヲ休メ
テ喜ヘハゲニモ舟楫ノ利ノ大ナル古モ今モ同シ
理ナルヘシ七里ノ風帆恙ナク桑名ノ城壁漕メク
リ亭午過ルユロホヒ岸ニ著スレハ其アタリノ郎
舎ニハテ暫ク休ミ又出ヌ

大嶋

是ハ川ニヨリ佐屋路赴船路ニアリ長嶋ト
ハ川隔テ西方嶋也桑名川セヨリ十町許

新田嶋

川口ヨリ東ノ岸ニアリ自此辺左ニ右度
山右ノ方庭二三列ノサキ、山見ユル

長嶋

自河口到于此
十余町

城主 松平佐渡守

此所或ハ勢別ノ内或ハ尾別ノ内也

當城元來勢別國司持分家臣守之永祿年中信長公國
司北畠具教卿ヲ退治然後一向宗一揆追討天正二
年滝川左近將監一益ニ賜當城尾別西方北伊勢上郡
ヲ領ス天正十年賜上野一國厩橋ニ居城又同十一年
織田信雄ノ領トナリ家臣岡平次守之同十八年信
雄卿奥別放同年福嶋掃部助正頼賜當城分限三万石
然後和別守多郡得替慶長六年菅沼織部正定益賜
當城分限二万石美濃ノ内共領之息志ノ守定仍相續
之分限同高定仍奉之無嗣子舍弟織部正定芳嗣之

元和

六年江別膳所ニ得替同年松平隱岐守定勝桑名

ノ外當城附七千石為御加増賜之元和七年隱別次男

定行居城分限七千石寛永二年松平義作守定

房隱別賜當城分限二万三千石同十二年豫別今治八

得替同年松平能登守定政分限七千石然後有御加増

都合領二万石三別荊屋得替是慶安二年也同年松平

佐渡守長高賜當城分限一万石貞享 全高息佐渡

守良光相續之

香林衣... 元和六年... 寛永二年... 貞享... 佐渡守長高... 守良光相續之

織田家譜曰永祿十二年八月進發勢別到于桑名攻淺
香城亦下秀吉為先手城陷乃分軍士圍大河内城之陷
或曰天正四年大河内城没落大河内者 先是勢別因司
国司北畠一族相替居之所行國務也 北畠具教畏信長之威議和以信長次男信雄為婿号北
畠中将約以讓国具教家人 柘植三郎左衛門受信長密
旨與亦造下総守 後羽柴 相謀弑具教々々多刀教數
十人而死 柘植等即納信長兵故勢別諸城皆陷信長誅
柘植以徇馬傳止閑役使信雄居大河内城領十石上
野々信包 信長居上野城領五石信孝 信長三男 居神
戶城領五石石以尾別西方長嶋城并北伊勢五郡賜瀧
川左邊將監一益
天正二年五月長嶋一向宗蜂起信長率大兵攻擊之既
而諸軍退去柴田勝家伊賀伊賀守為殿敵要於難所而

擊之勝家伊賀皆蒙病氏家常陸入道卜全戰死不
同七月信長信忠率大軍發向尾別西方攻擊長嶋一向
宗一揆々々等連年馮險而屢為暴故也信長向一方信
忠向一江口佐久間柴田稻葉時屋向賀鳥口信雄將舟
師自桑名進馬一揆屢戰敗信長分兵圍篠橋大鳥居唐
戶嶋大嶋中江等墨八月陷大鳥居城斬首二千入贈其
耳鼻於城中既而篠橋城降九月廿九日長嶋渠魁等乞
蜂疑城退去信長敵伏兵於堤邊放銃炮射矢如雨一揆
半死其免者大怒直進地入信長一族陣中力戰而遁去
此時信長兄津田大隅守信廣弟半左衛門秀成從弟津
田市介信成等數軍戰死信長使滝川左近將監一益守
長嶋城且以北伊勢五郡授之 十月信長婦岐阜
豐臣家譜曰天正十一年五月滝川一益以信孝勝家皆

亡故力衰乞降秀吉移之使居越前大野威力卓錫甚非
旧時之比秀吉獻長嶋城於信雄

同十二年春信雄有勳滅秀吉之志三月信雄殺其家臣

松嶋城主津川玄蕃允星崎城主岡田長門守荊安賀城

主浅井田宮九於長嶋城此三人皆有勇名秀吉稱之眷

遇頗渥信雄待臣讚之故信雄疑而殺之

同十二年冬信雄、秀吉、和睦、時秀吉、羽津、三陣

三信雄、八長嶋、三陣、十月廿日、夫田、川原、三、參會、

夏、前段、委、記、之、

慶長五年九月、冥、ヶ原、ノ、役、三、八、長嶋、ノ、城、將、福嶋、掃部

頭、加勢、大鳥居、ノ、城、主、山岡、道阿、弥、也、

東方村、桑谷、ノ、内、也、是、ヨリ、濃、別、岡、ヶ、原、ノ、路、ヲ、記、ス

照源寺 浄土宗寺領 二百石 御朱印地也

四明寺 法華宗寺領 二百石 御朱印地也

長壽院 禪宗寺領 百石 御朱印地也

右桑谷ノ内東方村ニ在之

福嶋 是モ桑谷ノ内也関ヶ原へ行路也

大鳥居 路ヨリ右ノ方旧墨アリ天正二年七月長嶋

之城兵ノ音二十級ヲ切ト云信長記ニ委ニ

慶長五年関ヶ原役之時ハ山岡道阿弥大鳥居ノ城

主タリ但長嶋ノ城ノ加勢ト云ニ長嶋ニアリ夏ハ

前段ニ記之

野代 太神宮ノ旧跡此所ニアリ是ヲ野代ノ宮共

野代ノ願宮共云

五十鈴宮鎮座本記ノ畧ニ曰畧倭姬命天照大神ヲ
戴奉リ大和宇多秋志野宮ニ四年又佐々彼多ノ宮
ニ移リ夫ヨリ伊賀國隱市守宮ニ二年同國穴穗宮
ニ四年又同國取都美惠宮ニ二年淡海國甲可日
震宮ニ四年同國坂田宮ニ二年美濃國伊久良阿宮
ニ四年尾張國中嶋宮ニ三月伊勢國桑名野代宮
四年次鈴鹿奈具波志忍山ニ六月時ニ大若子命
參相テ御供ニ仕ヘ弟乙若子命ヲモ仕ヘ進メラレ
次ニ向佐加藤方斤極宮ニ四年次ニ飯野高宮ニ四
年其ヨリ掃田ヲ經テ魚見白濱真名胡ト云所ニ至
リ佐々年江ニ御船ヲ留メ給リレヨリ大淀伊極宮
遷リ一ニテ倭姬命詔ニテ曰南ノ山イニ夕見給
ハス吉宮所有ヘキトテ大君子命ヲ遣サレ倭姬命

八皇太神宮ヲイタキ奉リ小船ニ召小川ヨリ御
幸ナル畧是夏神邊内宮ノ条下ニ委記之

伊勢名所撰述集ニイテ野代宮 桑名郡

志仁王ノ十一年九月一日桑名野代宮ヲ遷ル
以遷座甲ケ年カキリニ於テ古礼ヲ行フ
或ハ桑名郡野代宮ノ神社

再遊紀行曰 此所天正年中長

桑名

山崎閣存

大觀顯然爽氣汎 風行地上勢陽中 雲神闡說此
遷幸ノ四載奉存野代宮

殿目村

船路ノ川筋 左ノ岸ニ在

唐戸新田

川筋ヨリ右ニアリ 此所天正年中長

嶋一向集一揆ニ時、墨ヲ構ル所ナリ

殿目新田 川筋ノ左ニ落合 トノ目新田前ニアリ是ヨ
リ右ニ川筋ニ入ハ鍋田通り也

鍋田 此所ニ自尾別被居之在船着所是ヨリ宮ニテ

福田 海上ニ里餘ヲ漕テ到テ熱田

三屋村 川筋左ノ山岸ニアリ此村ハ桑名ヨリ関ヶ原
へ出ル路筋ノ村也太田 山崎 河戸

駒野 トツクミナ
多度山ノ下也

落合 三屋ノ辺ニアリ右ヨリ流来ル木
曾川也左ヨリ流来ル大垣長柄ノ

未流ナリ

笠松 木曾 大山 是ハ成瀬氏ノ城下也

太田 木曾川ノ渡場自桑名川船往来

多度山 三屋村ノ辺ヲ遇テ左ニ見ユル高山ヲ云禁ニ
由井太田山崎河戸駒野奥庄村トテ段々ニ在

是ハ桑名ヨリ関ヶ原路ノ村々也川筋ヨリ見ユル

多度権現ノ社ハ山ノ半腰ニ在此山ハ濃列多藝山ノ

ツキ也延喜式神名記曰伊勢国桑名郡多度神社
名神

五明村 川筋右 焼田嶋 下平村 川筋 勝嶋勢

西保村 左ノ岸 大森村 右ノ岸 古河村 右ノ岸ニアリ
嶋見ユル

佐屋 自桑名到テ此 名護屋領

船着ノ所ニ番所アリ自尾別守之番人ニ断テ人馬ヲ
呼川端荷物ヲ運送スル也

津嶋 天王ノ社ハ是ヨリ川上ノ方行程一里ニアリ此

川、濃列長柄川、下流也。以船往來自由、大河ニテ
越前、坂郡上郡ニテ川船上下往及ス

加取村 是ハ天正二年長嶋一向宗一揆蜂起ノ時墨ヲ
搦タル村也

由井 多度山ノ下ニアリ此辺ニテ多度山卑シ多度
推現ノ莫ハ勢陽難記委ク載之仍畧之多度山

金山ノ共推現深ク惜ニ給故ニ取莫不成ト大和

金峯山ノ如シ延喜式神名記ニ伊勢國桑名郡多度

神社名神

大田村 右ハ佐屋川也左ハ
多度山ナリ **山崎村** 右ニ佐屋川アリ
左ニ多度山アリ

内佐屋村 佐屋ヲ出テ略路ノ右ニアル村ヲ云

依木村 略路ノ右ノ方ニアリ此辺ヨリ勢甲ニテハ
大形略ノ路多シ

日置村 略ヨリ右ニアリ

自此辺左ノ方津嶋、牛頭天皇ノ社見ユル

八幡宮 略ヨリ右ニアリ

追分 自是左ノ細路ニ入ハ津嶋ノ社也

津嶋 自追分到此
十六町

牛頭天王社 大社也此神ハ素戔嗚尊也播剌廣峯

洛東ノ祇園モ同神也每夏六月十四日奉禮アリ

永祿元年秀吉公イマタ賊士ノ時津嶋ノ町入堀田孫

右衛門カ所ニテ盗人ヲ捕シテ豊臣ノ家譜ニ見ユ

名新方角抄カモ伊勢ノ尾張ノ常名ノ中ノ津

嶋ノ事ヨリモモ公何ノ名也之尾張ノ事モモモ

津路より津江のありてつる之れは東海に
津路ありてのり田里之ありてつるありて
私曰聊不審アリ但下津ハ神木寺ノ辺ニアリ是ハ
中仙道ヨリ熱田へ出ル路ナリ尾別熱田ニテク順
次ハ中仙道岳井宿ヨリ尾別熱田ヲ記ス別卷委記
之

宗寺ノ記ヨリいそおりの子清徳つるは
ふとそられは光徳なり順立誠田をわ忘れ三カ
とそられは光徳なり順立誠田をわ忘れ三カ

つるは光徳なり順立誠田をわ忘れ三カ
つるは光徳なり順立誠田をわ忘れ三カ
つるは光徳なり順立誠田をわ忘れ三カ

若名は神徳とこれつるの屋くちすは
月名三里つるつるは光徳なり順立誠田をわ忘れ三カ
つるは光徳なり順立誠田をわ忘れ三カ
つるは光徳なり順立誠田をわ忘れ三カ

姥懐 津島より十餘町川上ニアリ是ハ皆牛頭天
王津島御鎮座ノ始光此所ニ降臨ノ地ト云傳

神木寺 西條村ニ會具 是ハ佐屋ヨリ熱田ニ赴
ク所ノ村也

古河木村 自路左ノ方ニアリ

諸桑村 自路左ノ方田中
小橋 長四五間諸桑村
路ナリ 通路ノ処也此也

日光橋 長士間暇ノ内泥川ニ渡ス此也左右深田
ノ所ナリ此橋ナラハ馬足立カタシ

下家村 路ヨリ左リ 星塚村 路ヨリ右ノ
方ニアリ

椿市村 路ヨリ左ニアリ

如守 自佐屋到于此 名護屋領
或神守

熊野権現 白山権現 此社馭中左側ニアリ華表
ハ所ノ軒並ニ立

河戸村 是ハ桑各ヨリ関ヶ原へ 駒野 多度山ノ下
行路ノ驛也

唐長五年ノ役ニ石田治部少輔ニ成其身ハ大垣ニ
在テ高野越中守高山忠右衛門喪九兵衛收傳藏蒲
生倫中守大場土佐守北川平右衛門ニ三十餘騎ヲ
添テ東兵ヲ支ヨトテ駒野ニツカハス市橋下總守
是ヲ見テトク懸テ一戦ヲ遂ニトスル所ニ伊勢へ
廻リタル西軍四方討ニテ太田ノ辺へ孫ルヲ見テ
市橋孟勢ニ戦ニテ難叶ケレハ不戦シテ引取ヌ叔
駒野ニ在タル三ノ軍兵夜明ケハ大垣へ入テ
入ニトテ蒲生備中守ト高野越中守ト及口論ニ更
此所ニテノ克也関ヶ原記ニ安シ

奥庄 多度山左 鳥田村 多度山左
ニアリ

多度川 路ヨリ右ニ流ル各所也養老ノ辺ヨリ流出ル

たづ川の清い水を飲むと病が癒えるといふ

志津

追分是ヨリ右ニ赴クハ横曾根ヲ經テ

沢田ニ會スル路ナリ

横曾根

是ヨリ尾別熱田へ川舩ヲ往及スル港也自横曾根到于宮舟上十三里

栗笠

高田

津屋

養老

自駒野到于此

此所左ノ山ニ瀑アリ名所也旧記曰元正天皇癩老元年九月近江国へ行幸山陰山陽南海道ノ国司奏津ニテ歌舞遊興アリ其ヨリ美濃ニ行幸東海道東山道北陸道ノ国司来集テ雜伎ヲ奏ス美濃国富貴郡多度山ニ泉アリ是ヲ手ヲ洗ヒ面ヲ洗ハハ皮

膚滑ニナレリ又痛アル所ヲ洗ハハ忽ニ愈一是ヲ吞或ハ浴ヌレハ白髮モ黒リナル又ケタル髮モ再生ス眼清モ明ニナルトイヘリ天皇此所ニ行幸ナリテ此泉ハ老ヲ癩ヲヘシト宣フ即年号トス養老ノ瀑トハ是也ト云

右列方南抄云富井より南なり養老の湯あり富井より二里あり富井より伊勢の養老湯あり富井の湯あり富井の湯あり

一 養老湯名園及川記云云

養老湯の名を云ふる所あり

白石 石畑 竜泉寺

櫻井

澤田

追分

澤田内ニ有是ヨリ右ニ赴クハ岐
阜加納路左ニ赴クハ多羅越ラシ
江別石田到ル路也直ニ行ハ関ヶ原也

綾野

岐阜

加納

一瀬

多羅 土岐 上多羅

川 歩渡ナレ共
洪水ハ通路止

牧田川 歩渡也水上ハ多羅

牧田

自養老到于此
牧田ハ此辺ノ惣名也

二俣村 津屋池

門前村

関ヶ原

関ヶ原ノ駅中ノ追分ニ出ル自牧田到于此一里半也関
ヶ原ハ中仙道ノ驛也中仙道ノ支ハ西遊行囊拔ト号
ノ為別卷

芋嶋邑

加守ノ出

高木村 路ヨリ

元ノ郷

橋 長十間此辺既路也
路ハ土手ノ上ヲ行

橋 長十間泥川

下田村 自路左

安馬村

自路

挂村 自路左ノ方

豊嶋村

自路

自加守此辺ニ行

路ハ土手ノ上ヲ通ル 左右ハ深田

浮嶋

大明神社

石ノ方 見ユル

西條村

自路

追分

自是左ニ赴クハ津嶋
出ル路也自此辺神木寺ノ塔見ユル

神木寺

弘法開基
寺ナリ

津嶋

七社明神社

路ヨリ右仙翁寺村ノ前ニアリ

三寶寺村

路ヨリ左ニアリ

自此辺左ノ方十餘町ニ真嶋村見ユル此所ニ目醫師
在諸國ノ眼病者貴トナリ賤トナク未集テ治療スル
所也

砂子村

方場ノ驛之入口ニアリ

万場

自加守到テ此

名護屋領

此驛ハ万場川ヲ阻テ岩須賀ト西村ニテ人馬ヲ次也
下十五日万場ニテ次或ハ万馬

万場川

船渡也凡河幅三町程此川ハ名護屋
辺琵琶嶋ヨリ流ル来ル

岩須賀

上十五日此所ニテ人馬ヲ次万場川ヲ阻テ西村
驛也

八幡宮

岩須賀所ノ出口ニアリ

八奴宮

路ヨリ左ノ田中ニアリ

自此辺左ノ方ニ蜂須賀村前田村戸田村十ト云所
リ何七名將ノ出所也蜂須賀ハ蜂須賀阿列ノ出所前
田ハ加賀能登越中三ヶ国大守前田又左衛門利家雅
名大ト云ニ時ノ住所也蜂須賀氏元祖ヲ小六ト云永
禄年中ニ信長御水卜秀吉ニ命メ北方ノ城ヲ令築其

比蜂須賀辺ノ御士千二百餘人其拔類者則蜂須賀小
六同又十郎稻田大炊助青山新七同小助河口久助長
江半丞加治田隼人日比野六太夫松原内匠等也秀吉
ニ從テ北方ノ城ヲ築キ秀吉ヲ以テ為城主給ト云此
支信長記ニ委ニ

柏森

茶店アリ

此辺ヨリ左ニ阿波手ノ森并ニ清洲ナリ
名不ナリ角抄ニ云阿波子家源ト云下津ノ里此ヨリ
幾ハ何建保岳名此ノ里ニ
梅政在ル名家ニ云乃ニ云成ノ里
今亦 乃ノ里ノ何ニ此浦ノあり云々

津班元

歌名

多哉 云々 神ノひはりや
新形 何れノ人ニ云々
新後 何れノ人ニ云々
建保 何れノ人ニ云々

阿波手ノ杜ノ中ニ鹿ヲ居ヘテ香ノ物ヲ漬ル事アリ
藪ニ香物ト云世俗ノ諺自是起ト云委ハ美濃路ノ別
巻ニ記ス

八幡宮

柏森ヲ出テ
左ノ田中ニ有

高須賀村

路ヨリ左

本郷村

自路
左ニ有

米野村自路 北敷村自路 天満宮自路 北長柄村自路

南長等村 天王社右二有 一屋橋長十間泥川

一屋村自路 二入子村自路 橋村自路

五入子村自路 ウトウ橋長世間泥川ニ渡ス是ヨリ名護屋ノ町口入ル

一ノ華表是ハ執田ノ華表也 二ノ華表上 千体佛通所ノ

十五堂通所ノ内ニアリ 誓願寺厄寺也執田ノ宮

追分 是ハ執田社ノ東ノ門前ノ衢ヲ云佐屋路

美濃路七里渡ラヌル者皆會此所

東遊行囊抄 自製田到于

六

執田 自桑谷到于此 海上七里 自佐屋到于此 名護屋領

此所ハ東海南海船著中国西国并ニ美濃路ヨリ東國往及ノ駟自東國赴中西國北越ノ驛客皆此所ニ津ノ故号執田津暖智郡ノ内人家多ク繁栄ノ地也 名護屋城下ニテ行程一里半軒續也

船場 是ハ桑名ヨリ来船ニテ此所ニアカル又是ヨリ南海西海へモ美濃ノ内所々川船往来ノ便地也

甚事不集、いそくあつらう、乃月をりんと又樂
回少く、船りのつとま

馬九右衛門光廣

こまにやこれおつらうの海よ、ま帆くらぐりりるりてとれ
船の上凡

癸未紀行日

二十四日晚到熱田尾陽司船者渡辺半十郎使来日互

相自江戸告日與伊豆守松平信絶同船則勞辛別可備一艘

請問所求余報日此行既賜傳馬匹夫之朱印則裝具奴

僕肩輿等所采之船吏當辨之如余父子者問信絶而後

以謝之既而與信絶同舟

羅山子

鷓舟崔軸李秋天曉白桑名発熱田中有白頭者白浪使星

枕籍亦同眠

名別方角抄、いそく熱田内高南向く、るる居る方
りあう、小よ、あう、南より、西へ海行つ、あつらわした
い、あう、日中、あつらわした、船さうの馬、細流、八、船の
さう、あう、あつらわした、船さうの馬、細流、八、船の
あう、あつらわした、船さうの馬、細流、八、船の
あう、あつらわした、船さうの馬、細流、八、船の
あう、あつらわした、船さうの馬、細流、八、船の
あう、あつらわした、船さうの馬、細流、八、船の
あう、あつらわした、船さうの馬、細流、八、船の
あう、あつらわした、船さうの馬、細流、八、船の
あう、あつらわした、船さうの馬、細流、八、船の
あう、あつらわした、船さうの馬、細流、八、船の

熱田大神宮

社領七百十七石

別當 妙法院 大宮司 田嶋 神主

東ノ門ヲ春敲ト云古ハ大真殿ト額アリ唐ノ天子玄宗ノ使方士此門ヨリ尋入其後額ノ文字ヲ改ム方士来ル莫春也此縁ニ依テ春敲門ト云ト也楊貴妃方士ニ會給シ堂トテ社中ニアリ

南ノ門ヲ海藏ト云古ハ海上門ト扁タリ門内ニ浪溢入莫間アリ故ニ改海藏其後ハ浪入莫十三ト云々

西ノ門ヲ鎮皇ト云王城鎮護ノ心ナルヘシ高倉宮 北ノ方十八町ニアリ是ハ人王十二代ノ帝成務天皇ノ陵社也 本地昆沙門

八也 本地不動ト云々 八劔宮 草薙ノ劔ニ小不動七休ノ劔ヲ一宛加ヘテ

日破宮 本地地藏ト云々 氷上宮 本地觀音 南方一里海辺ニ在ト云々是

稲田姫ノ靈社也後号岩戸姫

大福田 本地竜樹菩薩

此神昔平將門為調伏討手ノ大將軍ノ詔アリテ星崎ノ御番水ト云所ニ神與ヲ出ニ奉ル時ニ轅ニ血ツク故ニ

本社ヘハ不奉入別 一社ヲ建テ號大福殿云々

源太夫神 本地文珠 牛摩乳ノ靈社也

末社 大社八座

乙若子社 彦若子社 今彦社

水向社 素戔為宮 日長社 青今夜

同 六社トハ右八座ノ内乙若宮彦若宮ヲ除テ是

ヲ六社ト云共イヘリ或ハ又

楠木 寶田 龍樹 山王 今宮 西天神 海天神

是ヲ末社ノ六座ト云

同小社

御崎社

王若宮

紀大夫神脚摩乳也

八百萬神社

二名新宮

南新宮

徹社

八子宮

鉾取

内天神

鈴御前

牛山戸

松雄

神成司

新水上

松巴

西御藏

若宮

御井殿

輪藏

御與屋

鐘樓等巍然トシテ大社也然ル

二星霜多ク積リ漸及大破天和ノ始有修造古ノ宮社ヲ
畧メ被建之當時ハ古ノ十力一ノ宮造也

神社考曰素盞鳴尊詣雲列有老公妮中坐少女而泣女甚
美素尊問何為哭對曰我有八兒其七已為蛇吞今此一
女又無由脫故哭素尊曰與女於我可解此愁父母日諾素尊

問曰其蛇何形對曰八首八尾其可怖也素尊乃設八糟成

以醪酒裝女置山頂其影沉八糟大蛇見之以為真女便矯

八頭飲八糟已而躡醉不語素尊拔所佩十握劍斬蛇至一

尾又少抉割而見之有宝劍素尊奉劍於天照太神大神曰

我房天巖時落此劍于近列伊布貴山是我神劍也大神命

其孫瓊杵尊降此國付三神器為國鎮劍其一也累也為國

宝至崇神皇帝怒劍靈威召良冶模打獻回劍于伊勢大神

宮新劍留王宮景行之也東夷叛帝以皇子日本武尊為元
帥征夷武尊兼詔東征諸伊勢大神宮大神賜此劍赴東武
尊佩劍至駿列浮嶋原諸夷謀曰皇子雄略勇健非我等可
向當設奇計乃白言皇子神威夷族不敢非命此地宜遊獵
皇子虞遊可乎武尊諾已而夷族縱火于時初冬此野拾草
烟焰迅飛武尊拔劍揮之四旁一里草大焚夷其大自正初

蛇帶此劍其尾常有雲氣故曰天叢雲劍至此名草薙劍武
尊自東歸還劍於勢宮其後以劍藏尾列執田神祠
日本紀日本武尊東征還於尾列即要尾張氏之女宮以貴媛
而淹留踰月於是聞近江膽吹山有荒神即解劍置宮貴媛
家而從行之至膽吹山神化大蛇當道武尊跨蛇猶行時
雲霧無路武尊始有痛身還於尾張爰不入宮貴媛家便移
伊勢而到尾津遂萌于能褒野時年三十又曰日本武尊所
佩草薙橫力是今在尾張國年無市郡執田社
神代卷曰草薙劍在尾張國吾湯市村即執田社部所掌之
神是也又曰草薙劍昔在素戔嗚尊許今在於尾張國也
神皇正統記曰宮貴媛者尾張稻種宿禰之女也
天智天皇七年盜竊執田社草薙劍盜者道行也新羅沙門
道行聞劍靈欲之仍入神祠持誦一百日竊取劍裏僧伽梨

携至筑紫赴本邦忽暴風起波怒水激不得去凡行取劍三
回皆不得始持誦七日取劍而出俄黑雲一帶自空下奪劍
送到神祠行益欽劍靈又持誦五十日取劍至近列蒲生郡
黑雲下奪如先至此持念百日遠至筑紫而遂不得道行亦
名道智

余嘗欲修本朝綱目有志而未早逮見道智之竊神劍也
慨然試筆削曰盜竊草薙劍不克得昔聖人作春秋齊豹
陽虎書盜况其餘乎又况妖僧之智乎書以為戒庶盜竊
之輩有懼也然聞入大社門徒一年聞入中社門杖八十
亂入小社中苔五十是衛禁律之所載也道智誠不免誅
焉而又神宮亦不得無罪矣哉虎咒出於押龜王毀於積
中是誰之過歟神宮官司何不能守哉吾於是乎見神劍
之弥靈也淳屠之益妖也神司之猶怠也

延喜式第三日尾張國熱田社每年春秋二節節別屈僧六
十四日轉說金剛般若經一千卷其布施供養以神封物充
之一

宋景濂羅山集日東曲云玉環妖血汚寰中豈有靈祠祀鬼

雄莫是仙山真練緋雪膚花白主珠宮國有揚貴妃祠

余案支那諸書指言蓬萊者於日本有三所一日紀別能

野一日駿列富士一日尾列熱田

惟肯東海瓊華集曰世傳秦徐市上書始皇諸女童五百

人入海求三神山不死藥而得海嶋遂留不還即我朝尾列

熱田神祠是也或曰紀別能野熊野者未之見也熱田者十

礎方楹涌出平沙之上前瞰碧海曙露方頃與天無降殆廢

乎神仙樓真佳境也史秦氏之并吞也六國侯王天下智勇

屈其策權其鋒無不被之汚蟻唯武陵種桃之客商嶺采芝

之翁及徐氏求藥之舉超然引去况乎使五百人同脫虎口

之厄其偉罔兇畧賢於桃客芝翁甚絕則天精爽為神為仙

騁靈千載世所傳者不可誣矣

曉風集云尾張之熱田大明神則揚貴妃也畧在仙傳拾遺

揚什伍云東海上蓬萊是指熱田蓋熱田廣前有小松茂茂

奕然是號蓬萊俗相傳云熱田大明神化揚貴妃亂彼大唐

故玄宗因天寶之蒙塵熱田之廣背有一基之石塔其長三

計其形大醜巫祝等指之曰貴妃之塔婆也又廣外有玄太

輔之祠金云云宗三郎之祠也貴妃謂揚什伍曰此後一紀

當相見願保聖躰云云是其證也其外熱田有八劍宮等靈

處皆神秘而無知焉

壹和止再福寺有女誓與祥延祿名而延少於和天曆三年

初祥延為維摩會師知抱憤虜所業陰尾列熱田神祠有巫書

人禍福吉凶無不中一日以來與衆人時和在焉獨不頌也
衆人怪之和又自疑巫曰彼比丘本寺之神猶能曾顧弗吾
所庇也故不與末耳於是旅人七馬此馬沛文人不得近知
聞巫言怪喜私念實如巫言我從此馬不傷於雷霜便越馬
馬又柔馴而不遷衆人疑嘆巫又大言曰春日明神今降求
也又向和曰我末弃汝汝何自棄哉汝不知乎天帝玉簡夙
記維摩講師祥延在先壹和次之和聞之悔咎歸南京四年
果兼維摩之詔

惟蓮有至孝國俗以七人骨空高野山蓋律弘法大師奄華
三會之大定也蓮携母骨赴高野路次尾別執田神祠神宮
多忌諱蓮不得宿便寓神祠南門側蓮知神忌觸故又不敢
近祠也其夜大祝夢神官備儀告曰神寄語於祝我今有高
賓乞君珍御食詰且使者檢祠中無人門側只蓮一人而已

祝延蓮蓮告觸事祝曰我夢受神託知神之不思備也乃供
盛饌送著紀列

治養三年流藤師長尾別師長詣執田夜彈琵琶明神現形
衆白捏告田吾在天為文曲星一切衆生水命元辰在地為
赤青童子以司一切珍寶

元曆元年七月源賴朝造新社于鶴宮若宮之側勸請執田
大明神以為鶴宮末社九月十日祭之

右神社考

日本編年錄曰天智帝七年戊辰冬十一月詔賜給五十疋
綿五百疋常百牧於新羅王又賜使者金東嚴等物各有差
遣小山下道守小賴於新羅道行入尾張執田祠盜草雜劍
逃往新羅中路悉風雨不能進而歸後納劍於執田
朱鳥元年丙辰六月天皇病崇草雜劍送置于尾張國執田

社是年取神劍崇之於
或書曰熱田社日本武尊御垂跡或曰景行天皇四十九年

熱田神垂跡尾張國
東鑑曰治養五年三月十九日尾張國住人大屋中三安資

馳參鎌倉申云去十日侍中家行於墨俣河與平氏合戰侍中
從軍悉以滅亡平家乘勝之間去其所被竈熱田社託一陣

敗之上者重衡朝臣以下定近來於云當國在廳等多以
從平氏之處女資抽忠直尤神妙之肯被仰念云云

建久元年十月廿七日賴朝上御潔存令奉幣熱田社給當
社依為外戚祖神殊被致中心之崇敬云云

同四年十二月令獻熱田社神馬給相摸守惟美為奉幣使
伏見院御守正應四年二月二日當社回

祿 竹千代君 六歲時父廣忠御三列尾崎二在

城之尾列ノ織田彈正忠信光ノ領へ出張有へ之サア
ルニ於テハ駿列ノ今川義元ヨリ援兵ナリテハ叶カク

シトテ義元へ内々被仰之義元有許容依之 竹千代君
ヲ為質駿列へ遣シ給フ然処ニ塩見坂ニテ田原ノ戸田

奉奪取織田殿へ渡ス信光熱田大宮司 預置之然トモ
廣忠御織田家へ從ヒ給ハス此支駿列へ聞へケレハ義

元雪存長老ヲ大將トシテ廣忠御へ加勢タリ雪存駿ヲ
立テ三列ニ到リ土川ニ陣ヌ尾崎裏悦之田入坊山ニ登

リテ見之折節園ノ城主内藏カ五百許ニテ織田方ニ尾
崎辺ヲ適ル尾崎裏支之明大寺町口ニテ内藏乃殿ヲ討

取ト云云三河記ニ委此後竹千代君ヲ織田勘十郎殿ニ
三列記 信長記ニ日永祿三年五月駿列ノ今川義元尾列ニ出張

シ其勢四万愛智郡香掛ト云所ニ著陣ノ由清洲 聞上
信長逆寄ニ是ク追散ヒトテ清洲ヲ未明 打立給フ
相從フ人々ハ織田造酒丞岩室長門守長谷川橋本佐助
藤八山口飛騨守加藤弥三郎河尻与兵忠筑田出羽守佐
々内藏助只十騎ニハ過カリケリ執田ノ社屋口ニ到リ
給ヘハ雜兵千余人方々ヨリ馳加ル信長則當社ニ御参
詣謹テ拜伏シ今度ノ勝利ヲ祈誓シ給ヘハ神也納受シ
給ヒケル内陣ニノ物ノ具ノ音ス信長大ニ悦武井肥後
八道夕庵ヲ召テ頂書ヲ令書夕庵懐中ヨリ硯墨紙ヲ取
出シ信長ノ前ニ跪テ聊思雅ノ書之室前ニサシヲ信
長則打立給ヘハ白鷺ニ旗ノ光ニ飛行サナカラ白旗ニ
流トリ見ヘニ日本武尊ノ白鳥ニ化シ給ヒ例モ思出
シテイト頼母

天正三年五月三刻長篠合戦ノ時信長信忠父子五万騎
ノ軍兵ヲ率ノ十三日ニ岐阜ヲ立其日熱田ニ著陣翌朝
於神前信心ヲ凝シ當勝利依神應護祈リ給ヘハ内陣ニ
ノ響ノ音頻ナリ信長信忠勝利又無疑ト悦給フ不斜
其神宮田嶋丹後守惣檢校千秋喜七郎神酒ヲ奉ル同十
六日三刻牛久保ノ城ニ御著陣ト云云
信長今度長篠合戦ニ勝利歸陣ノ時為神馬柴田草七ト
云名馬ヲ獻シ且又熱田ハ斂ノ宮ヲ始トシ末社ニ至ル
一テ悉ク有造營奉行ハ肥部又右衛門尉ト云云

古事記よりいへば尾張守長久保の四年或り
を以てあよ
たそはれりのこハ陽ノ光者七志有るを以て

らあやめりて終ふと記す無回といふ事うぬれり
一多院の由りて大に百年といふ物なき事なるを保
の由りて何とてか南のりかきとてうらうらり
大教若成す事とこれあやて法を記しとらあや
此物より書物なき事とみちぬ記しとらあや
つとんとす事記しとてさうとてさうとて
しとて何とてさうとてさうとてさうとて

海に記すといふ事 昔はとてさうとてさうとて
ぬ無回の事と記しとてさうとてさうとて
むとてさうとてさうとてさうとてさうとて
さうとてさうとてさうとてさうとてさうとて
さうとてさうとてさうとてさうとてさうとて
さうとてさうとてさうとてさうとてさうとて

つとらといふ事 終つてさうとてさうとて
さうとてさうとてさうとてさうとてさうとて
無蓋社乃の事と記しとてさうとてさうとて
あやとてさうとてさうとてさうとてさうとて
さうとてさうとてさうとてさうとてさうとて
さうとてさうとてさうとてさうとてさうとて
さうとてさうとてさうとてさうとてさうとて
さうとてさうとてさうとてさうとてさうとて
さうとてさうとてさうとてさうとてさうとて
さうとてさうとてさうとてさうとてさうとて

先づつとてさうとてさうとてさうとて
さうとてさうとてさうとてさうとてさうとて
さうとてさうとてさうとてさうとてさうとて
さうとてさうとてさうとてさうとてさうとて

堀川院後百そやんそと何つたかあるあやう
おのののひのひのあやう

細川忠秋 赤木津氏記より

二月廿九日 天正 尾張藩の長津社務 越後氏の

家よりとらりりあり又社務 尾張藩切替

く新法のつあふふやめあうり八舞のまひり

或のそまをたしり 物産何そののらあむるを

りんと

かそくまひりてあひの社あひたのあ

尾山子あむるふ云

日甲武を東くく之り 尾山子あむるふ云

媛高きあむるふあむるふ云

神とつらひやあむるふ云

このあむるふ云

日甲の曲りあむるふ云

これ社のあむるふ云

あむるふ云

東征功就凱旋時 宿所曾微宮箕姫 誰道馬嵬坡下鬼

一朝来此立其祠

癸未紀行曰

熱田宮

逆旅經過拜熱田 森々松樹瑞籬前 閼宮靈跡尾張国

大社帳名延喜年 桑城將軍建勳業 李唐天子不見神仙

威嚴永作邦家鎮 八叙霜寒東海天

深草元政身延紀行曰

西風七里片帆懸 波上飄々著熱田 邂逅相逢三五夜

超遙飛過九重天
吾孝不容携骨

仙山縹緲宋麻句
徘徊月下憶僧蓮

鯨波泐花徐福船

遠遊紀行曰

執田宮

進雄天降獲裴雲

倭武東征名草薙

須信知仁賴勇行

萬年室祀吾湯市

再遊紀行曰

執田宮辭

素戔嗚尊斬蛇而救稻田媛兮八雲之出雲之詠此和歌之
基兮日本武尊征夷而慕橘媛兮過新治筑波之句是連歌
之源兮夫五七五七七之為言也自然矣乎我人口者然素
賊之不宥或中焉或否焉獨二尊之出為廢物之首兮其心
聲之節以垂不朽兮嗚呼素尊降之神代矣武尊誕於皇也

其相去也蓋不知幾歲也知也兮仁兮勇兮共天之所置兮
宣矣哉永在宮中而深護室劍兮使彼叛賊之黨不獲覘兮

絕句

武尊再起致成功

八岐蛇斷四夷謐

我國治平自進雄

萬世秋清神劍風
執田民舍粘素尊像而誤謂之鐘馗矣因賦一絕以

正之云

八束髮兮十握劍

斬蛇寸寸素尊威

本朝豈奉異邦鬼

莫道鐘馗粘尸扉

追分

執田ノ門ノ前ニアリ是ヨリ西北ノ方ニ赴
ケハ美濃路佐屋路ナリ名古屋ノ城ハ西北
ニアリ爰ニ美濃路ノ大畧ヲ記ス委ハ中仙道ノ岳井ヨ

リ熱田ニテノ別卷ニ記ス自此追分赴右ハ名古屋城下
ヲ歴テ美濃路ニ赴ク順次也

蛇塚 自路有左自此辺名古屋
一テヲ千本松通ト云也

高倉宮 路ヨリ右赤中在
是成務天皇陵也

追分 是ヨリ尤ハ佐屋路
右ニ赴キ行美濃路

宇渡坂町 昔此辺千本松
トテ松原也

柗社 路ノ右ニアリ是モ
熱田未社ナリ

大日堂 通所ノ右ニアリ
自是名古屋内也

大御堂 丸ニアリ
七寺 丸ニ有
万松院 浄土宗右ニアリ
我直公御菩提所

観音寺 在左
正光院 右ニアリ浄土宗

式久乃の... 此の... ぬみらるる...
て〜ら〜

大光寺 右ニアリ
浄土宗
名護屋本町 名護屋ノ通り町ナリ御城
ハ右有リ自宮到于此一里半

城ハ京町通ノ右ニアリ
柳當城ノ権輿者天文年中織田
彈正忠信秀後改備後守始築之次男以吉法師信長令居
之其後織田孫三郎信光其後林佐渡守奉織田彦五郎信

行守當城信行有故為信長被殺而後天正年中織田内大臣信雄領之信雄居城清洲也同十八年信雄ヲ奥列ニ放之秀吉也而後豐臣中納言秀秋領之是元居城ハ清洲也慶長始福嶋元取門大夫正則領之同五年松平薩戶守忠吉卿ノ御領トナル忠吉公御病死無嗣子而後同十二年平岩主計不親吉賜當領分限十石是元居清洲同十五年庚戌命諸別牧伯修造之由中ヲ廣大ニシ隍ヲ深クシ墨ヲ高クシテ賜得川右兵衛督多利卿後改官任次第進ニ補任二位大納言慶安三五月七日ニ逝去右兵衛督多光御家督後改女寛永七年五月三日初叙從五位上官職次第御昇進經中将到參議經參議到中納言元禄年中到大納言御領分ハ尾列一田美濃信濃三河ノ内共高六十一万九千石歟

住吉町

上畑橋 長十間

塩屋町 右ノ方ニ堀川アリ

幅下 是ニテ名護

屋ノ所

相切所 小橋九間

唐子町 座古町 小橋六間

追分

是ヨリ元ニ入ハ小牧路

大橋 長六十八間名護屋ノ堀川ノ上ナリ此橋ハ尾屋嶋村ノ内ナリ

尾屋嶋野町

追分 是ヨリ元ニ入ハ津嶋路

土器野新田

追分

自是元ニ入ハ神水寺蜂須賀下津津嶋路ナリ先卷ニ記

深口村 五條橋

清洲

自名護屋到
于此二里

旧墨通町ノ右ノ方ニアリ平城ナリ
此城ハ織田家代々天正十八年ヨリ

中継言秀秋慶長、始福嶋丸由門大夫正則同十三年
平岩主計及親吉同十五年名護屋ノ御修造、時殿之

稻葉

自清洲到此
一里半

名護屋領

石橋村 自路右

中嶋村 同右

西御堂村

高水村 同在

自路

檜造村

萩原

自稻葉到此
此一里半

西萩原

中田村

今村

板倉

五代村

蓮池村

自路
在丸

富田村

追分

自是丸ニ赴クハ
津嶋路

東小越

小越渡

舟渡
ナリ

小越

自萩原到此
一里

名護屋領

芋町

深町

小喚橋

阿字賀村

自貴村 右ニ

坂井邑

自路
有左

大脇村

自路在
右ノ方

小隈村

昔ノ
駅宿ナリ

御旅館 洲俣ノ東ノ岸ニアリ
洲俣川 舟渡
洲俣 自小越到此一里名古屋鎮

古橋村 自路左
結村 名所ナリサハタリノ東ノ岸ニアリ
明神、社右ノ軒並ニアリ

狹渡川 舟渡ノ大河也
粉町 加賀野井村 自路在右

三塚村 三味原

大垣 自洲俣到于此
城主 戸田采女正

城八町ヨリ右ニアリ
當城ハ天文年中織田因幡守守之天正年中池田紀伊守之助其後羽柴於次九秀勝丹波へ得替ノ後伊藤長門守威景守之其子彦兵衛其統之慶長五年ノ役ニ出城治ア
少三成ニ渡又同六年石川長門守康通賜當城分限五万石同苗日向守家成同主殿乃忠終ニテ當城主タリ同十四年下総佐倉へ得替同年松平田斐守忠良轉信列小室移當城邑部内膳正長威泉列岸和田へ得替松平越中守定綱賜當城寛永十二年勢別采名得替同年戸田龍門氏鉄賜當城同采女正氏信同左門氏西今采女正ニ到リ守之

抗瀬川 橋アリ長
水戸村 自路在
久植村 笠縫村 自路有右

荒川村

長松村

矢道村

自路有右ノ方

堰水

綾戸村、前十町計ニアリ是ハ御領ト大垣領
堀ナリ

綾戸邑

青野ノ原ハ谷田村ニ龍ノ窟カニ多藝山見ユル

相川 是ハ畝井川也小流ナリ自是右ノ方ニ熊坂長範カ
物見松見ユル

追分 是ハ畝井ノ驛ノ入口也自是西ハ畝井ノ驛東ニ迄
ハ赤坂ノ驛也委ハ西遊行囊杖ニ記之

右越田自社ニ追分濃列畝井追分迄大畧如斯委ハ西遊
行囊杖ニ記之

山崎村 長キ村也小橋アリ長十六間

法泉寺

禪在 右

安養寺

淨土 右ニアリ

天竜宮

小社也

村ノ龍ニアリ地藏堂

右ニアリ

白毫寺

左ニアリ地藏ト門ヲ合ヌ

糸田ハ此辺ヨリ尤ノ方十奈町ニ在里俗井戸田ト云ハ
清濁ノ誤也此所ハ治承三年ノ冬妙音院相国藤師長公

南野

自路五ニアリ或ハ鳴海野或ハ上野共ニ
昔ハ汐満ヌレハ上野へ廻リ汝于ニ浦

傳ニテ行ト云

名新方角沙中ニ
一ひつゝの橋 上野 松多の里
松多の里あつては中つたを
ゆき上野へすしつゝ流し
七地ハ東ノ山をく
たらしむるもあつては
こゝに在の里を望
たしあ

巻尾

名新方角海ニあつては上野や東ノ山をく
たらしむるもあつては中つたを
ゆき上野へすしつゝ流し
七地ハ東ノ山をく
たらしむるもあつては
こゝに在の里を望
たしあ

又此ひつゝの橋
たのまゝあつては
ゆき上野へすしつゝ流し
七地ハ東ノ山をく
たらしむるもあつては
こゝに在の里を望
たしあ

本地村

自路五ニ上野ノ方ニアリ

小鳴海村

自路右ニアリ考ルニ
此辺ナルヘニ方角鉄ニ星崎ハ
喚絶ノ濱ト云

ト鳴海トノ間ト云
今尋ルニヨヒソキト云所ナシ

巖の上人

新後探をてつゝあつては
まゝあつては
ゆき上野へすしつゝ流し
七地ハ東ノ山をく
たらしむるもあつては
こゝに在の里を望
たしあ

テニハッ橋

長四十七間

星崎 海辺也 橋ノ右ノ方 旧壘アル所ヲ云

此城ハ織田内大臣平信雄ノ家臣田氏カ所守之也

豊臣家譜曰

天正十二年春信雄有欲滅秀吉之志三月信雄殺其家臣
松嶋城主津川玄蕃星崎城主田長門守药安賀城主浅
井日宮丸於長嶋城此三人皆有勇名秀吉称之春遇頗渥
信雄待臣譖之故信雄疑而殺之吏聞于星崎星崎城中大
騷長門守弟晴五郎聚兵而守焉信雄恐秀吉之怒已故懇
懇遣使於

東照大権現請以後援乃從之 下畧

星崎乃角沙... 星崎ノ海邊也

星崎ノ海邊也 星崎ノ海邊也

星崎ノ海邊也 星崎ノ海邊也

星崎ノ海邊也 星崎ノ海邊也

星崎ノ海邊也 星崎ノ海邊也

星崎ノ海邊也 星崎ノ海邊也

星崎ノ海邊也 星崎ノ海邊也

星崎ノ海邊也 星崎ノ海邊也

しつゝいふや... 田所法平亮孝曰... 松尾の里

松尾の里

名所 松尾の里... 石田里

石田里

名所 石田里... 宇津美

宇津美

星崎ハツキ東海ノ海辺ノリ自天
ハク橋右ニ赴キ行程ハ九里ト云

豊臣家譜曰

天正十一年四月秀吉又赴美濃國田岐阜救重三七信孝

以勝家為後援而既滅矣故力尽相從者亦其少信雄率尾
張兵同田岐阜使人誘信孝曰可移居於尾張信孝出城衆
船到知田宇津美信雄遣其臣中川勘右衛門勸信孝死信
孝曰我國已察之即自殺此時信孝臣馬地五郎
其非殉死也長明

名所 海をいへば松の島... 沖津志和丸

小橋 長五間

鳴海

自宮到于此
一里半十二町

名護屋領

昔、鳴海ノ駅ハ此所ヨリ左ノ方山下ニテ今ノ駅ノ所
ハ海中ニテ有エ力漸々ニテ瀉ニ成テ後道ヲツケ替テ

此所ニ駅家ヲ立ト云云亦曰今ノ鳴海ノ駅ト云、
方ノ中間沙入ノ浮ニテ有シトナリ
東鑑曰建久元年十月廿八日於小能宿須細大夫為基賜
身暇迄于自鳴海此所候御馬前當國月平菴所領等令安
堵云云

永祿三年五月十九日駿河、今川氏元池鯉鮒、桶狭間
ニテ為信長討レ給又其比鳴海ノ城ヲハ克元ノ臣呂部
五郎兵衛某守之信長自池鯉鮒來テ鳴海ノ城ヲ攻ム五
郎兵衛一矢射テ後降參シ城ヲ開テ信長ニ渡シ克元ノ
死骸并シルシコ乞請死骸ヲハ鳴海ニテ葬シルシヲハ
駿府ニ送ルト云云

鳴海橋

長十七間或ハ由鳴共之此川ヲアツキ
川ト号ス

瑞祥寺 禪宗

後新

新嘉 君ノ方々々々ノ浦ノ濱林ノ下ノ木ノ下ニ

後新 我ノ方々々々ノ浦ノ濱林ノ下ノ木ノ下ニ

新嘉 今ノ方々々々ノ浦ノ濱林ノ下ノ木ノ下ニ

あま 今ノ方々々々ノ浦ノ濱林ノ下ノ木ノ下ニ

新嘉 今ノ方々々々ノ浦ノ濱林ノ下ノ木ノ下ニ

わよとされたるはに足あかりの何をもてさし置き
て死ぬるはもてし一に物家のいぬのいす
しやるに流るるをあらふはさし置きてさし置
てふ家さし置きてさし置きてさし置きて
ふはさし置きてさし置きてさし置きて
流るるをあらふはさし置きてさし置きて
羽軍をあらふはさし置きてさし置きて
さし置きてさし置きてさし置きて
日記のいすさし置きてさし置きて
折れさるるをあらふはさし置きてさし置きて
さし置きてさし置きてさし置きて
さし置きてさし置きてさし置きて
さし置きてさし置きてさし置きて

山のいすさし置きてさし置きて
法房のいすさし置きてさし置きて
甲のいすさし置きてさし置きて
小室のいすさし置きてさし置きて
さし置きてさし置きてさし置きて
さし置きてさし置きてさし置きて
さし置きてさし置きてさし置きて
さし置きてさし置きてさし置きて
さし置きてさし置きてさし置きて
さし置きてさし置きてさし置きて
さし置きてさし置きてさし置きて
さし置きてさし置きてさし置きて
さし置きてさし置きてさし置きて
さし置きてさし置きてさし置きて
さし置きてさし置きてさし置きて

癸未紀行日

鳴海

輿馬苦行程

尾陽望大瀧

潮平鳴海瀉

寄信武陵城

遠遊紀行日

宿鳴海

山崎園存

海水盡無聲

夜風怒浪生

信哉韓文語

物不得平鳴

再遊紀行日

鳴海

家鄉西望思悠々

候虫鈴韻風濤響

短堠長亭莫與儔
薄暮天寒鳴海秋

貝原村

自路左ニアリ

諏方赤

自路右ニ見ユル

神明宮

自路右ノ思ニ

肩川

鎌銃橋

長七間段、内ニアリ

自此辺右ノ方行程十四五町ニ桶狭間、村アリ橋ノ邊ヨリ右ニ入細道アリ

有松村

此所ニ木綿・染明衣アリ名物ト云ハ
豊後ニホリノ如シ

今川義元墓

落合新田村、西自路右三及ハカ
リニ松五七本立タル中ニアリ

義元生害地也

織田家譜曰

永祿三年五月十九日今川義元發駿河率四万余人畧遠三
二列到愛智郡吉掛里納糧於大高城尾列諸城多降義元
信長聞之欲迎擊之杯佐渡守日彼眾我寡何為當之不如
守城信長日守城則泉有怯心即勸酒於士卒而進發路詣
熱田社奉納願書義元屢陷數城而有驕心使兵士先行義
元到桶狭間不設備而宴於松原邊時信長察之俄來攻義
元亦陣急擊之義元狼狽戰死斬其首駿河兵敗走信長
兵追斬之得首二千五百余級乃進兵攻數城陷之既歸清
河乃修熱田社自是全領尾列
以源武鑑云今川義元尾列ニテ討死ニ給ニ時帶セラレ
タル太カハ山蛇ト云服部民部ト云者其ヲ取テ信長ニ

獻_ス此太刀ハ今川ノ先祖清和帝十二代ノ末源義氏ノ
三男今川四郎國氏ヨリ彼家相傳ノ重宝也信長コレヲ
源貞昭公ニ奉ラルルニ條御新宮ノ祝儀也云

落合村

此村ヲ出テ小橋アリ長六間自此巴九ノ松山ノ上ニ塚
アリ是ヲ仙人塚ト号ス古変アル由

五軒屋村

河野坂 茶店アリ

大脇村 自路有古

高賀茂村 自路有ニアリ高賀茂
ハ異國人名也旧記

八幡宮 自路左ノ方ホリ中ニ小社アリ

堰川 北十三間長尾三ノ堰ナリ又名古屋領下

海乃記云 山ノ中ニ堰門何カ有リハ河ナリ

乃軍兵交々為シ涉流ノ下ニ石ヲ并排セリ乃
記云云々ハ川トスル

乃軍兵交々為シ涉流ノ下ニ石ヲ并排セリ乃
記云云々ハ川トスル

遠遊紀行日

今思村

今思村畔分參尾兩國相備一小橋 橋下看來接土亦

好為笑具意無聊

今思村

茅川村 長キ村也茶店多シ 温飢、名物ナリ

此村ヲ出テ路ヨリ左ノ方ニ一継村見ユル

芦屋村 或ハ一里山村凡或ハ外共川共云茅川
ノワ、キ也

追分 自是右、衢ニ入ハ葎屋ノ城下ハ行路也

上敷原

下敷原

八軒屋

菊屋 自追分到于此

城八町ノ九ニ有當城ハ水野氏代々主城也高橋氏ニ領
之天正三年十二月水野下野守信元有故生害護河
而後舍弟惣兵衆忠重賜當城分限二万石叙和泉守慶長
五年七月上旬忠重於池鯉斬賊加々井弥八郎生害而後
水野日向守勝成同年賜當城分限二万石叙和泉守慶長
又忠重孫横死分限三万石而後和別郡山得替是元和二
被召出之云云
羊也同年水野隼人正忠清賜當城分限二万五千石寬永
九年當國吉田得替分限三万石
忠房賜當城同年加一万五千石亦高共四万五千石ヲ領

丹波福知山ニ得替同年松平能登守定政賜當城分限二
万石定政ハ隱岐守慶安三年七月九日於東叡山道世号
不伯同四年箱垣攝津守重種賜當城分限二万三千石重
種病死息信濃守重祥家督相續之今高内三千石舍弟數
馬配分重祥實ハ藤也重祥病死息和泉守繼之
永祿三年分川茂元尾列ヲ窺ニシ時菊屋ノ城ハ八位賀
ノ恐ノ者ヲ入テ城至水野藤九郎ヲ討是ハ疾妬ノ心深
ニ依テ城中ニハ力ニ敷人ナクシテ無云田斐然所ニ水
野下野守菟ウケテ駿別勢ヲ追拂フト云云
三河記 曰菊屋ノ城主水野和泉守父ハ水野右兼門尉
也息女ヲ德川廣忠弼ニ嫁シ御子一人御誕生是
德川竹千代君也然ニ廣忠弼夫妻ノ御中アシク成テ菊屋
ニ送返サレ右兼門尉其姫ヲ久松佐渡守ニ再嫁シテ子

三人アリ所謂松平因幡守同源三郎甲陽信玄へ入貨松
平隱岐守也右衛門尉死去嫡子下野守信長へ内通
家康公ト不快ナリケレ共叔父ノ御吏ナレハ萬御看免有
ケレ氏年ヲ且リ月ヲ超テ遺恨深クナリケレハ平岩七
之助ト同宮権左衛門ト兩人ニ密ニ御付ラレテ下野守
鷹狩ニ出ラレタルヲ見付町ノ辺ニテ殺シ之舎弟惣兵衛
ハ別心ナキニ依テ葎屋ノ城ヲ賜フ惣兵衛後ニ号和泉
守下野守生害ノ時ニ歳ノ息アリ乳母是ヲ懐抱メ葎屋
ノ城ヲ逃出土井村ノ土井小左衛門利雅ト云御士ヲ頼
ミ彼知息ヲ小左衛門カ為ニ娘子元服メ土井甚三郎利勝
ト号不利勝及長智徳備リ寛宥ノ器量アリ次第ニ立身
ニ任大炊次天下ノ執政ヲ司ルト云云
家長ト云祀ト云々參列葎屋水野和泉守等ノ道有

御一打無り

其の如くは

池鯉鮒 自鳴海到此 葎屋領

領主 稻垣和泉守

御旅館 驛ノ入口右ニアリ

池鯉鮒大明神 通所ヨリ左ニアリ 社領 世石葎屋
ノ城主ヨリ寄附之

神主 永井主殿 別當 惣福寺

延喜式神名記曰參河国碧海郡知立神社云 此神ハ社
家ノ説鶴鶴草嘗不合尊云云 或曰當國猿投明神ト一神

也又日信刻誅方ト同休ノ神共云縁起ヲ可尋
社辺ニ東西ニ長キ他アリ是明神ノ御手洗ナリ此池
鯉鱒多クアレ氏里俗明神ノ使者ト号ノ更ニ取ルナ
ニ此魚多クハ一眼ナリトイヘリ里俗ノ説アリ畧之又
當駅近辺ニハ桃木アリ花咲クアレ氏實ハ生セスト云
是モ明神ノ嫌給フ故ナリト里俗ノ説アリ

法藏寺 禪

淨雲寺

淨土

慶長記曰慶長五年百田治部少輔三成乱ヲ起セシ比
行府公ハ上杉景勝ノ為征討眞茹ニ進発シ給遠別濱松ニ
御止宿、時堀尾帯カ吉晴ハ北国子當ノ為越列ニ歸府
又ヘシト、仰ヲ蒙リ既ニ歸路ニ赴キ當国ニ川ノ駅ニ到
木村弥一石梁門ニ行會役ハ東国へ通ルト云テ行過

又於途中加賀井弥八郎ニ逢フ良久ク對話打連テ池鯉
鱒ノ旅店ニ入然ル外ニ水野和泉守其節病疴タリトイ
ヘ氏可談故アリテ出向吉晴ニ逢フ加賀井モ同席
餐應過テ灯ヲトル比吉晴睡リ居タリニ隙ヲ窺ヒ弥ハ
脇差ヲ抜テ和泉守ヲサシ殺ス吉晴驚テ起アカリ刀ヲ
抜ク加賀井スカサス吉晴カ片輔ヲ切ル吉晴少モヒル
イヌ加賀井ヲ別ヨセテサシ殺ス於是和泉守カ従者氏
走り出テ吉晴ヲみタントス吉晴灯ヲ踏消シ暗ニキレ
ニ裏口ヨリ忍出テ家来、者氏打連テ畠崎ニ行後日ニ
内府公御称羨アリケルト云云件ノ加賀井ハ治部少輔カ
密旨ヲ受テ秀頼公ノ御使ト称ス奥列ニテ行ケルトモ、
内府公カレニ謁シ給ハ子ハ空ク歸リケルコト本意ナリ
思ヒテ和泉ヲ討ケルト云云委シクハ関ヶ原記ニアリ

是ヲ執行トナシ云云

池鯉鮒野 或ハ池鯉鮒ノ馬場共云半里四方ノ廣キ野ナリ毎年四月三日祭祀過四日五日比ヨリ五月五日一テ牛馬ノ市ヲ立ル閏月アルハ閏月ニ祭祀ノ執行五月五日一テ三十日間驛ノ東ノ端ヲ

リ此野ニテ假屋ヲ立テ近國ノ馬衛集テ商賣ス其外種々ノ賣買并哥舞妓擗等見物ノ類多シ

湘秦紀行曰毎年四月三日祭祀アリ閏月アルハ閏月ニ是ヲ執行トナシ其一月ノ間ハ驛中毎日市立アリ今其時節ニ行逢ヌレト兩ヲ逢ニトテ輿簾ヲ下シケレハ其色ハ見分子共賣買ノ價ヲ論スル色車ニ盈テ過ヌト云

追分

自是龍ノ嶺ハ橋ノ路也到テハ橋行程八九所此追分ハ来迎寺村ノ東ノ出口小橋ノ前也

小橋

長五六間ノ地ナリ来迎寺村ノ出口ナリ

今邑

自是村龍ノ方ニ里村ニユル

大濱茶屋

是ハ大濱ト云湊へ行巷ニアル茶店ナリ故ニ大濱茶屋ト云此所温飢

名物アリ長キ町ナリ

湘秦紀行曰尾崎御下今村トノ間ニ茶屋アリ大濱へ赴

ク路筋ナル故ニ大濱茶屋ト名ツク此所ニ温飴ヲ調ヘ
テ其塩梅宜シケレハ行旅ノ良賤箸ヲ下スト聞テ時ニ
モ雨ノ降ケレハ暫ク奴僕ヲ休ニ為立ヨリテ二三椀ス
スミテ盡ク點心トス

追分 大濱茶屋ノ町ノ内ヨリ右ニ赴ク襪アリ是
大濱ノ湊ニ赴ク路ナリ經大濱西尾ノ城下
へモ行也

安祥 自追分到此

此所ニ旧墨アリ永祿ノ此織田輝正忠 備後改平信秀持分
其後徳川家ノ御持分トナル
三河記曰天文年中三刻小豆坂合戦ノ後從駿刻臨濟

追分 池鯉鮒野ニアリ是ヨリ左ノ
橋ノ道也

橋 自追分到此 此所昔ハ驛宿也古ノ海道筋ナリ

昔業平東行ノ時此所ニ到リ餉クヒタル所トテ松陰ニ
石塔アリ村中ニ川アリ是ヲハ橋川ト云北ヨリ南へ流
小河也此川ニ一丈許ノ四角ノホヲハ渡シテハ橋ト号
ス昔ノ繪ニ書タル橋ノ形ニハ異也後世ノ田夫ノ所為
ナルヘシ寺アリ淨教寺ト云或ハ業平寺ト云本尊觀音
也其ニ在中將ノ影アリ其序辺ニ少キ池アリ池中ニ杜
若アリ此花ハ昔ノ色ヲ残セリトナリ謡ニ色ハカリコ
ソ昔ナリケレト作りタルニヨクアヒタリ

三河の八幡宮に
おまかせの御願

堀河院中上座

新撰の
後法皇の御願

おまかせ

海江名
の御願

あまの御願の御願

北條院

あま

あまの御願の御願

あまの御願

あま

あまの御願の御願

後法

北條院

あまの御願の御願

光原

あまの御願

あまの御願の御願

四葉の御願の御願
あまの御願の御願

源光の御願の御願

あまの御願の御願

あまの御願の御願

あまの御願の御願

あまの御願の御願

あまの御願の御願

靈均曾佩此花来

原野池

或ハ原野、沢ハ橋ヨリ今ノ本通へ出ル方
アリト云是モ名所也

西行

夫本

西行の歌に云く
原野の池に
花を採りて
佩くは
霊均の
遺徳を
慕ふ
心也

牛田邑

来迎寺村

或ハ廿八夕リ村凡云

寺ノ雪舟和尚ヲ大将トシ

義元三河ニ出張シ以大军安

祥ノ城ヲ取卷急ニ攻之城主織田三郎五郎殿ヲ二九ニ

追下ニ鹿垣密ニ夕結テ借織田彈正忠信秀ノ方へ申遣

ケルハ三郎五郎殿下得川竹千代君ト取代給ニ欽其比

代君尾別熱 廿六夕ハ三郎五郎殿信長腹切セ申サント

田ニ御誓居 廿六夕ハ三郎五郎殿信長腹切セ申サント

十リ彈正忠信之竹千代君ト三郎五郎殿ト取替奉ル

竹千代君ハ駿府へ御越少将ト官、町ニ御歳七歳ヨリ

十九ノ御歳ニテ御座ナサレ御艱難ノ御事ナリ十七ノ

御歳駿府ニテ御元服元康ト申奉ル十九ノ御歳置崎ノ

城ニ御本居家康ト改給フト云云 亦ハ三河記ニアリ

日目村

櫻井村

大濱 自安祥到于此
二里半

此所一東南西海、淡舟著也

土場川 舟渡也

西尾 自大濱到于此
城主土井式部少輔利忠

當城不知權輿天正ノ未ヨリ田中兵部吉政持分慶長七
年本多縫殿頭康俊賜當城分限二万石元和三年江別膳
所得替同年松平將監成重賜當城分限二万石同六年得
替同年本多下慈守俊次賜之分限三万石寬永十九年得
替同年太田備中守資宗賜之分限三万五千石正保二年

遠列濱松得替同年并伊兵部少輔直之賜之分限三万石
万治二年遠列掛川得替同年增山彈正忠正利賜之分限
二万石正利病死息兵部少補利順嗣之分限同高寬文三
年當列下館得替同年土井兵庫刀利長賜之分限二万三
千石内三千石^{加増}利長病死無嗣子養子土井式部少補利忠統
之
堰水 大濱茶屋ノ町ノ中程ニアリ自是西ハ葎屋
領東ハ巴崎町ノ中領也

尾崎郷

千石八ノ村

太心毛村 自路
有古

本郷村 自道
有龙

鳥頭坂村

追分 有鳥頭坂村 刀り自是龙、瀬二入八尾
別、各古屋二到九路也

堤

平針

追分 平針村中二エリ 右二部、信別課方
出ル路也

伊保 自平針
二里尾三ノ塚

川嶋村 尾到内

南須川 二里

宮 各護屋内
五花町 自追分到于此
七里半

武節 三里是ヨリ美濃へモ三別鳳来寺へモ行岐アリ
鳳来寺へハ石神坂トテ大坂ヲ越テ行也

根羽林 三里此所ハ信別内
三田信塚也 間山 深山 平屋 三里 浪合 三里

駒場 三里 飯田 三里 城主堀美作守 市田 一里

序桐 三里 井田 二里 宮田 三里半 大田 切川 橋アリ

井鍋 二里 高遠 二里 城 追分 右ニ赴田列青柳 左ニ赴信前上諏方

右追分ヨリ青柳ニ信列路大概如斯委ハ西遊行囊 是故ニ記之仍畧之 久礼戸村

自此辺龍ノ方遥ニ猿段山見ユル右ニ東條山見ユル 大高ノ旧墨ハ西天矯ノ前ヨリ右ノ方ニ入ル細道ヲ經テ 行程廿余町モアリ永祿ノ比大高ノ城ヲハ鶴殿長助守 之同三年五月今川守元尾列出張ノ時ハ鳴海城主山口

左馬助カ詞畧ヲ以テ義元ニ屬セシメ兵糧ヲ入其比 家康公ヲハ元康公ト申奉リ義元ノ御方ニテ大高城ヲ守 護ニ給フ然ニ同十九日義元於桶狭間為信長討レ給テ 駿別勢悉ク敗散ス下リ入ル 元康公ハ此城ヲ堅ク守 リ給テ同廿一日ニ大樹方 入セ給同廿三日ニ罌崎ノ 城ニ移リ入セ給ト云云委ハ參河記ニ見ユ

西矢矧 景行天皇御宇日本武尊東夷征討ノ時尊 於此所矢ヲ多作セ給ノヨリ里名トスト 云 古ハ此所馭宿也傀儡ノ在所也或ハ矢作ト書 長者屋敷ノ跡尤ノ方田中ニアリ長者トハ今驛俗ノ 云本陣也

觀音堂 長者カ 光明寺 淨土 時宗寺

新羅 一 〇〇人の夫と云ふことしとすなりあることん豊田の

新羅親降

ち豊田 やし江川とのふとるを海に 軒揚よりんすん
将軍を殺す事多し後文と記述を并難世にたの記述
先を記の里とくありうたのさうりす事ありのみら
志を記述する

みちの州のむす行板のみらしとて事と記述の
記述を記述する世に何のさる事と記述の里に記述
と夜のさる事月とすよりのありと記述のさる事
ゆめとす九月 子載とす一 過万新とす瑞めとす
ゆめとす
君とす八月の月の名とすとて事と記述の
ありと記述のさる事とすと記述のさる事とす

備 一 〇〇人の夫と云ふことしとすなりあることん豊田の

名下五月

而して事と記述のさる事とすと記述のさる事とす
名下五月

新羅を記述のさる事とすと記述のさる事とす
名下五月

さる事と記述のさる事とすと記述のさる事とす
名下五月

さる事と記述のさる事とすと記述のさる事とす
名下五月

さる事と記述のさる事とすと記述のさる事とす
名下五月

日所竟存は中絶を記述す

やまの若原とすらん
二条おと羽村の若原
まゝとて若原井原とすらん
越成とすらん
あまもつらん

若原野月

あまの月若原を照らす
あまの月若原を照らす
あまの月若原を照らす

若原野月

あまの月若原を照らす
あまの月若原を照らす
あまの月若原を照らす

若原野月

あまの月若原を照らす
あまの月若原を照らす
あまの月若原を照らす

若原野月

あまの月若原を照らす
あまの月若原を照らす
あまの月若原を照らす

若原野月

あまの月若原を照らす
あまの月若原を照らす
あまの月若原を照らす

若原野月

あまの月若原を照らす
あまの月若原を照らす
あまの月若原を照らす

若原野月

あまの月若原を照らす
あまの月若原を照らす
あまの月若原を照らす

若原野月

あまの月若原を照らす
あまの月若原を照らす
あまの月若原を照らす

あつては五原のうらもはるあはれと云ふれあつての心
ちうくくはるをいふはあはれの中は里あつてのうらも
くくくあつてあはれの中は里あつてのうらも
くくくあつてあはれの中は里あつてのうらも
くくくあつてあはれの中は里あつてのうらも

光原

御下青錢捨若塵 小囊何足救窮民 客衣常溫秋風淚
多洒路傍無告人 西風吹起沙塵起 萬里無家客思
心 嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼

東隅雖得共桑榆 波激河辺千万夫 恩賜旌旗如日色
ひしとくはるをいふはあはれの中は里あつてのうらも
くくくあつてあはれの中は里あつてのうらも
くくくあつてあはれの中は里あつてのうらも
くくくあつてあはれの中は里あつてのうらも

癸未紀行口

矢矯橋

卧波二百弓 板橋霜既滿 東兵七要害
取勢與天通 銀漢月猶濃 中將統元戎
野草感朱萑 富余駟車過 矢矯無情水
澗雲落彩虹 思於馱子窮 河流今古同

遠遊紀行日

矢矯橋

橋勢如弓

再遊紀行日

矢矯橋

因有男豊矢作河

清世人無憂渡河

有感二首

人生直理水天然

大夫可字史魚賢

射雖正直可言中

要須著眼莫踉過

湘秦紀行日矢矧

河流似矢

天機活然

一任張弛

全

便呼是國號三河

大橋天下莫過此

流水感人矢作川

却奈逢蒙夷羿何

更有似君子端的

莫向世波變吾直

更有似君子端的

更有似君子端的

海道所々ノ大小ノ橋イカヲト云敷ニラストイハ凡其

長廿此ヨリ過タルハ十三建武ノ乱ノ始ニ新田貞貞節

度使ヲ奉テ関東ヘ下ルヲ足利直良鎌倉ヨリ出張リ

此川ノ東ニテ支ヘ上ノ瀬下ヲ瀬ヲ渡シテ進ミ菟ケル

官軍カ、リ合セ足利ノ兵敗北セモイヲ思出侍ル昔

ハ此所ニ富宗ヘ子ル長者モアリケルト聞テ今ハ東矢

矧西矢矧トテ僅ニ茅屋ノ荒廢セルノニ殘レリト云

東鑑曰

建長三年生相謀殺人ヲ行法師矢作九郎門尉長次同次

郎九郎門久連等於伍々木氏信武藤景頼執時頼是前將

軍頼經於京都百乱世之企云云依之鎌倉中物志云

矢作左門
此所住人也

東矢矯

或ハハ町云云思崎ノ入口也

松葉橋

思崎ノ入口惣門ノ前ニアリ

思崎

自池鯉釣到于此

三里四町

城主 水野豊前守

町ノ入口惣門アリ左ノ方ニ番人ノ居所アリ
城ハ通町ノ右ニアリ大手ノ門町並ニアリ前ニ堀アリ
當城ハ松平次郎三郎贈大納言廣忠卿六代ノ祖徳川三
河守源慕親築之云廣忠卿ハ次郎三郎源清康男源家
中與之太祖
贈太政大臣正一位源家康公御父也或書曰

家康公ハ天文十一年十二月廿六日於當城御誕生自
清和帝廿六代ノ御苗裔自八幡太郎義家嫡孫鎮守府將
軍新田大炊助源義重男徳川源氏季十六代贈大納言從
二位源廣忠卿御子也御母奉號傳通院殿水野右衛門大
史忠政娘也

御諱始元隆後改元康後又改 家康永祿九年從五位上三
河守同十一年在京大夫武威日々盛昇進人ニ越経内大
臣到大政大臣
元龜元年移遠別濱松給當城ヲ自徳川二郎三郎信康君
讓リ給號思崎三郎君然ルニ天正七年九月十五日有故
御生害畢壽廿一歳奉號騰雲院殿
天正十八年原隠岐守某守當城分限三万石
慶長年中田中兵部少輔 賜當城分限十五万石而後

秀信公
御代

筑後久留米得替同六年本多豊後守廣孝賜之分限五万石同息豊後守廣重分限同高同伊勢守忠利寛永十一年遠列横須賀得替五千石御加増同年水野監物忠善賜之轉當国吉田移當城分限五万五千石内五千石御加増忠善延宝四年八月廿九日病死同年息右忠曰大夫忠春家督相統分限同高元禄 忠春病死息豊前守家督相統

松應寺 浄土宗寺領百石御朱印地町ノ後ニアリ 惣門ノ辺

大樹寺 浄土宗寺領五百石通所ノ左ニ在御朱印地也通所ヨリ左へ三町入テ寺門アリ

厭離穢土欣求浄土ノ御旗當寺ヨリ出ル是御當家御吉例ノ御旗ノ号スルハ參河記ニ見ユ

大林寺 浄土宗寺領百石御朱印地通所ノ左ニアリ

赤岩寺 天台宗寺領五十石御朱印地東惣門ノ辺

伊賀八幡宮

六所大明神 城ノ巽ノ方小豆坂へ行方ニアリ大社也 社領百六十石神主大燈大膳自松平移之

誓願寺 浄土宗 惣門ヲ出テ旅籠所ノ入口左ノ方山下ニアリ

筋違橋 通所ノ内ニアリ長廿四間

參河記曰廣忠卿十三ノ御歳御父清康ニヨクレ給ヒ大
伯父内膳殿ニ罷崎ノ城ヲ追出サレサセ給伊勢国ニ宰
人シ十五ノ御歳駿列ノ今川殿ヲ御頼智略ヲ廻シ給ヒ
テ十七ノ御歳大久保新八同甚四郎林茂助大原元近右
弟門成瀬又太郎八国甚六等ヲカタラヒテ罷崎ノ城再
入シ給ヒ云云

家康公御幼雅ノ間駿府ニ御座ニ永祿三年五月今川元
尾列ニ出張ノ時參列大高ノ城ヲ守リ給フ然ルニ同十
九日元於桶狭間為信長被討給フ依之

家康公ハ大高ヲ出給同廿一日大樹寺ニ入テ暫御追留此
時罷崎ノ城ニ入ヲカレタル駿列ノ城番衆城ヲ
家康公ハ渡シ奉ラント有ケレ氏元息今川氏真ノ思ヒ
給ハン一ヲ御延慮アリテ御猶豫ハ城番衆皆城ヲ開

テ駿列ハ外退ケ於之捨城ナラハ拾ハント宣テ當城ニ
入給フト也

巴崎三郎君ノ一有譏者御母儀築山殿

家康公下御離別ノ後越前ノ朝倉景方ハ御越是ヨリモ

御歸リ三郎君下御孫リヲハシニケルニ又田列ノ武

田勝頼方ハ御文アル由

家康公聞召御立腹在テ築山殿ヲ害シ三郎君ヲハ服部半

藏御入錯ニテ自害サセ奉ルト云云右委ハ參列記并年

譜記家忠日記等ニ載之云云

織田家譜曰永祿十年信長息女赴三列巴崎嫁

大権現長男三郎信康以修好仇父間右弟門尉信盛為使者

到巴崎時信康九歳信長息女亦九歳

天正十四年自秀吉公羽柴下総守勝雅ヲ為使

家康公ノ御上洛ノ夏ヲ勸メ給フ依之秀吉公ノ御方ヨリ
為質御母大廳ヲ巴崎ニ送り遣ニ給豊臣家譜曰

大権現依秀吉所請而使井伊兵ノ少補本多中務大補柳原
或部大補親族各一人往質於京都

大権現使井伊直政及本多作左衛門重次守大廳ヲ巴崎而
赴京直政重次警衛大廳積薪柴ヲ其屋傍

大権現於上方有不諦之受則為燒殺大廳也於是
大権現首途中畧

同十月十四日

大権現仕推中納言告其暇於秀吉巴崎留守聞其既出京而
大廳之番指解既而

大権現歸濱松云豊臣家譜ニ安ニ

宗長多記つとむるをいふ巴崎といふ松平以席

三郎友の家御く御海より 松平大物御多事五年
のりりあしと一白進るをいふ又一白進る御事
とろろ何れ中と云いふ此御事

癸未紀行日

巴崎城

累世先君多戦功 巴崎城郭聲蒼穹 国家根本從茲始

欲唱幽風歌大風

遠遊紀行日

留崎城

馱馬肩輿長短程 東風處々聽倉庚 今逢天下一家日

開闢洪基在此城

再遊紀行日

全

是天高聳固崎城 四海烟塵從此清 莫道百年無義戰

天正乱程有涼兵

湘秦紀行日

向陽軒春初

巴崎、城下、長キ町ヲ經歷ス抑此所ハ 御當家園基

ノ名城ナレハ周室ノ御幽漢祖、沛豐光武ノ南陽唐家

ノ晋陽ニモ譬言フヘシト云云

旅篁町

巴崎ノ町東ノ端惣門ヨリ外ナリ

一 土呂 針崎 巴崎、東南世町余ニアリ自巴崎上和田

世町上和田ヨリ針崎へ十二町ナリ

一 野寺 佐崎 櫻井自巴崎西南一里許ニアリ

一 上野旧墨 佐崎ヨリ西ニアリ

右此村々ハ三河記ニ載之、戰場也

一 細川谷ハ巴崎ヨリ北行程三里ニアリ谷字ノ出所ナリ

細川ニ輪番持ノ禪寺アリ

一 松平是モ細川ノ流ナリ右兩所ハ矢矧ノ以上三里許

ニアリ

蔭村也

カケ、御氏云巴崎ヨリ是ニテ軒ツ、キ

美野沢橋

長三間或ハ堰橋或ハカケ下橋トモ云

堰木橋ノ東ノ以ノヒアリ自是西ハ巴崎領東ハ御領也
御代官万年三元赤門支配

大平村

大西村

尤見エル

千光寺

一向宗村ノ右ニアリ

天神森

丸ノ方山下大西村ニ在社領廿九石御朱

印地ト云

大平川

此川ハ丸ノ方池兼村ノ辺ヨリ流出ツ
右ノ方ニ流矢矧川ト一流トナリテ鷲

塚へ流落ル也

橋アリ長四十間此川ヲ男川氏或ハ大矢川氏云當国三
ノ大河ノ其一也所謂矢矧川男川豊川也此故ニ為国名
云云

海道宿以百々よひとく大矢川ニ為おつ

世にわたりあつたはれしむらり川あつたはれしむらり川

再遊行記曰

大平川旧謂之男川今俗亦曰天川

山崎園抄

太平川上太平秋

刺史不過橋亦修

牛馬幢々無轉覆

童謡頗似誇王周

又

過客橋頭信馬行

高天瓦冷氣崢嶸

琴音千歲入松去

御念與民樂太平

城藪

太平橋ノ東、ツメヨリ尾ノ岸川上ノ方
二町許ニアリ竹、由ニ杉一本アル所ヲ

太神君、御館、

跡氏或ハ蒲冠者、館ノ路氏或ハ御曹

子、屋敷氏里俗、

訖區々也範頼三河国府ニ住セタル

一東鑑等ニ見工十郎藏人行家モ當国ニ居住ト云但

蒲崎ト云所此辺ナリ範頼、任所タル故歟猶可尋之或

又是ヲ御旅館ノ跡云此辺ハ思村、内ナリ思ノ御ト云

思村

自路九方ニ見ユル同方ニ舟山ト云所ア

小豆坂ハ思村、真ニアリ自海道行程十五町有、方
信長記ニ曰天文十一至 寅年八月十日駿列今川元遠
三两国ヲ畧シ尾別ヲモ從ントテ其勢四万余騎ニテ三
河国ニ出張シ生田原ニテ勢ヲ引方田原、其ト云者ヲ
足輕大將トメ小豆坂へ押寄ル織田備後守殿僅ニ四千
余ノ勢ヲ率シ當国安祥へ出向織田孫三郎殿ヲ大將ト
メ小豆坂ニ取上テ合戦ヲ始孫三郎殿勢駿列勢ニカケ
立ラレテ坂ヨリ下ニ引退テ敵勝ニ乘テ追来ルヲ孫三
郎殿引返給ヘハ同明高色ニ大將ノ返サセ給フト呼ハ

リケレハ相統テ返ニ合スル人々ニハ織田造酒允下方
左近其弟孫三郎思田助古永門佐々隼人其弟孫助中野
又兵亦追来ル敵ニ鎗ヲ合勝利ヲ得タリ小豆坂七本鎗
ト云ハ是也

三河記ニ曰駿列勢廣忠孫ニ加勢ニ三列ニ人数ヲ出ス
ヲ聞テ織田彈正忠清河、城ヲ立テ笠寺ニ一宿ニ明レ
ハ安祥寺ノ城ソレヨリ矢矧ノ下ノ瀬ヲ渡リ上和田ノ
柴へ未明ニ移リ馬込ノ原へ押出ス駿列勢ハ友川ノ押
出上和田ニ向_{自友川上}山路ナレハ互ニ旗ノ手見ヘツ
不見相寄ニ寄_{和田一里}カ小豆坂へ駿河衆登リケレハ織田
三四郎殿先手ニテ小豆坂へ上ラントシ給鼻合ニテ互
仰天ニ旗ヲ立テ戦フ彈正忠終ニ負テ清冽ヲサシテ引
退ル

小豆坂合戦ノ後安祥ノ城ヲ攻シテ前段ニ記之

地 長十三間太平川ノ分流ニ渡ス

蒲崎村

前ニ小河アリ蒲崎川ト云橋長四間小坂下也

自此辺左ノ舟山 廻敷村ニエルト同右ニ栗栖山見子ル

ソノ麓ニ養清寺村ナトアリ

小坂ノ丸ニアリ

塚松

是ヨリ右ニ入岐アリ是ハ足助吉良西尾

追分ノ路ナリ

足助

此所ヨリ紙ヲ多ク出ス足助杉原翼紙ナト

吉良

西尾

自追分
四里

へい坂

此所ハ湊也東南西海ノ便地也

赤山明神ノ山土川ノ驛ノ前丸ノ方ニアリ

